



東大・小布施
コミュニティ・ラボ

東大先端研・小布施町コミュニティ・ラボ

5年間のあしあと

2016



2020



目次

1. 東大先端研・小布施町コミュニティ・ラボとは? -----	4
2. これまでの活動を振り返る -----	8
2016年度 -----	8
空き家外観調査	
2017年度 -----	10
生活実態ヒアリング調査	
2018年度 -----	12
コミュニティ勉強会/都市計画勉強会/土地利用現況調査/ 集落全員アンケート・結果報告会	
2019年度 -----	18
地区計画勉強会・意見交換会/都住の縁側を作ろう!/ ふらっトーク～都住地区の「今」と「未来」～	
2020年度 -----	24
通り門調査/GIS・農地調査/分家住宅調査/都市計画キャラバン/ 写真展・シンポジウム～小布施の風景を考える10日間～	
シンポジウム あなたと描く小布施の未来 -----	32
3. これからのコミュニティ・ラボ -----	36
ラボメンバーの「小布施への想い」 -----	38
5年間の活動を振り返って -----	40
編集後記 -----	42



～5年間のあしあと～

2016年、小布施町と東京大学の研究協定が結ばれ、小布施町のまちづくりに向けた
協働の場として、**東大先端研・小布施町コミュニティ・ラボ**は設立されました。
それから5年間、私たちは小布施のまちと向き合い、考え、活動してきました。

この冊子は、その5年間の活動内容やビジョン、それらに込められた想いを「あしあと」
としてまとめたものです。私たちの想いが、この冊子を通して伝わると嬉しいです。

1

東大先端研・小布施町 コミュニティ・ラボとは？

活動の背景と目的

現在、人口減少や産業の転換が進み、豊かな自然と固有の歴史を持った全国各地の農村で、地域コミュニティの活力低下が課題となっています。小布施町はこの課題にいち早く取り組み、町内外の主体と協働でまちづくりを進め、交流によって新たな発想を取り入れてきました。こうして生まれた交流人口の一部をいかに地域へ定着させ、地域の歴史や文化、暮らしを未来へと受け継いでいけるかが次なる試練となっています。特に、歴史的資源を活かした観光地として明確な個性を内外に打ち出すことに成功しつつある中心部に対し、町内の周縁部において地域らしさの継承は重要なテーマです。

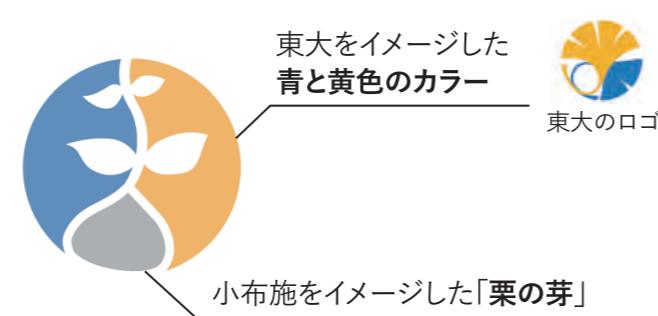
このような背景から、コミュニティの再生ならびに活性化に向けた調査研究、少子高齢化の進展に伴う諸種の課題に対応した先端的なまちづくり事業の実践を目的に、本ラボの活動が始まりました。町の周縁部の中でも、六川・中子塚・矢島・清水の4つの自治会から成る「都住地区」をモデル地区とし、地域の将来像・ありたい暮らしの姿を地域の皆さんと描き、それが実現するような土地利用のあり方、町の制度を考えていきます。

ロゴに込めた想い

本ラボのロゴには、以下の2つの想いが込められています。

- ①町民が持つ「タネ」が主役であることを忘れない。
- ②その「タネ」を支えるために東京大学として何ができるか考える。

この想いを大切に、活動に取り組んでいます。



メンバー

東京大学

新 雄太 特任助教



小泉 秀樹 教授



学生メンバー

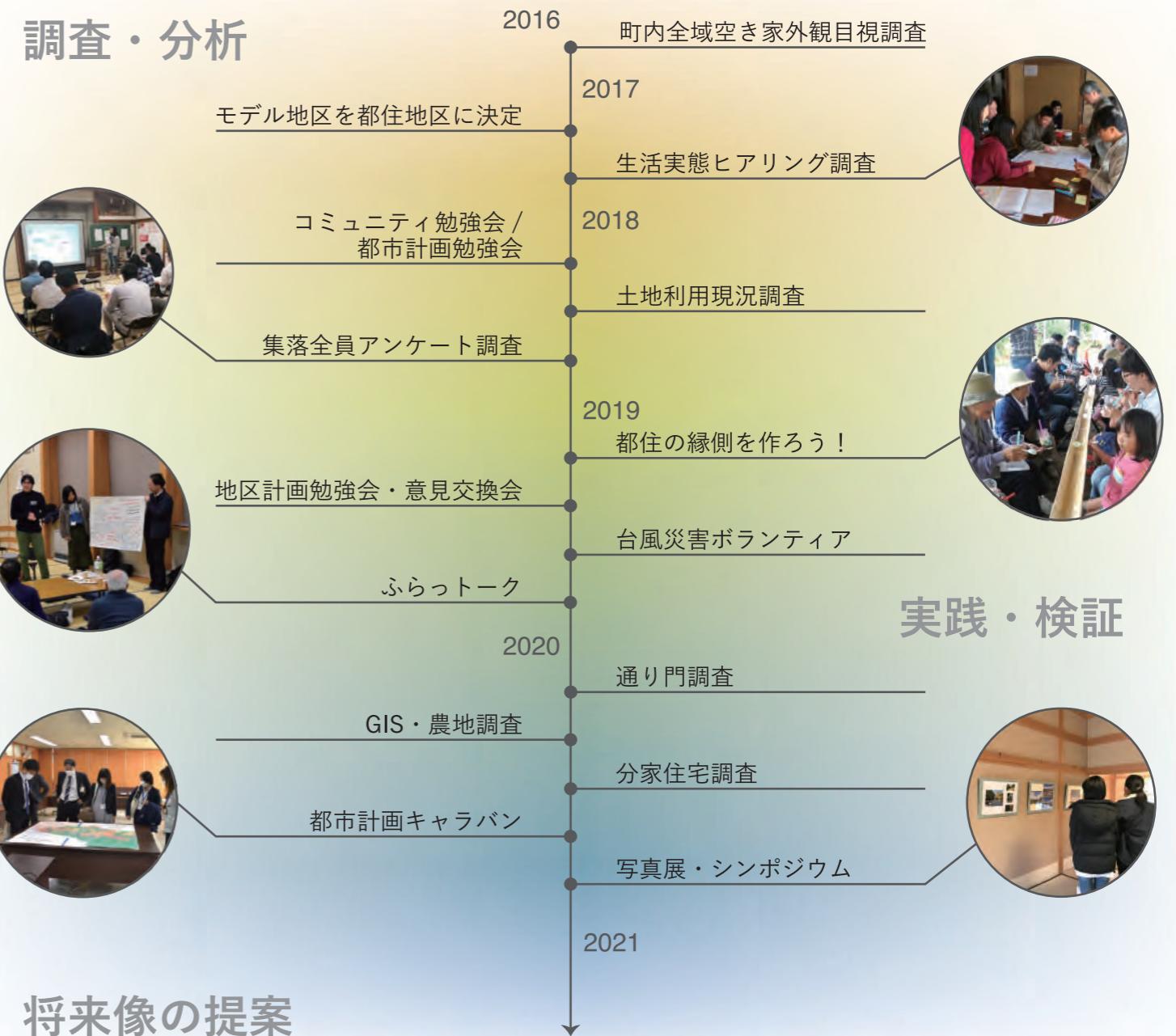
幅広い学年・専攻の学生が活動中です。
これまでに関わった学生は延べ30人以上。



これまでの歩み

2016年の活動開始から、地域の皆さんにもご協力をいただきながら、様々な調査を行ってきました。調査の結果を踏まえ、徐々に企画・実践の段階にも進んできました。2021年度以降、これまでの調査・研究から、都住地区の現況・課題を多視点的に捉え、これからの時代の生活景に向けたプランの提案へ進んでいきます。

調査・分析



将来像の提案

本ラボでは、これまでの議論から、複雑化している市街化調整区域における制度を見直し、「集落地区計画」を策定することで、持続的な町の将来像を実現していくことを目指しています。

集落地区計画の策定に当たっては、地域の皆さんと手を携え、対話・協働を通して、次代を見据えた地域のあり方と一緒に考えていきます。

集落地区計画について、詳しくは次のページへ！

地区の実情に寄り添った、きめ細やかな制度へ

地区計画等とは

既存の他の都市計画を前提に、ある一定のまとまりを持った「地区」を対象に、その地区の実情に合ったよりきめ細やかな規制を行う制度です。これを用いることで、地区ごとにまちづくりを進めることができます。

地区計画等の特徴

地区計画等は、住民からの提案により市町村が策定することができます。また、制度の構成としては、「地区計画の方針」と「地区整備計画」があります。全体構想を定める方針に基づいて、整備計画で施設や建築物に関する制限を定めることができます。

つまり、地域の皆で実現したい地区のあり方を考え、方針作りを通してビジョンを共有し、それに基づいて計画を作ることのできる制度と言えます。

地区計画等の種類

地区計画等は、右図のように都市計画法に基づく地区計画と、その他の地区計画で計5種類あります。

この中で集落地区計画は、集落地域整備法に基づくものであり、集落地域において営農条件と調和のとれた居住環境の確保や適正な土地利用を図る場合に用いられます。集落地域整備法の対象となる集落地域は、農業振興地域内と定められており、都住地区はほぼ全域がこの対象となります。また、同法に基づいて、他の地区計画では扱えない農振農用地（農業用の利用を確保すべき土地として、農地以外の利用が厳しく制限されている土地）にも計画を作成することができます。

そのため、小布施町の市街化調整区域には集落地区計画が適していると考えています。

集落地区計画できること

集落地区計画でも、通常の地区計画と同様に「方針」と「整備計画」を定めます。特に「整備計画」では、建築物の用途、最低敷地面積や塀や柵の高さなどの項目を定めることができ、また対象地区を複数のゾーンに分け、それぞれに規制をかけることもできるなど、地区の実情に合った計画を自由に作成することができます。

現在全国に16の導入事例があり、宅地開発によって農地と宅地が混在し、営農環境が悪化したものを集落地区計画によって解決した事例もあります。今後、地域の皆様と一緒に地域の将来像、ありたい姿を話し合い、この集落地区計画を活用して実現したいと考えています。



地区計画の方針	まちづくりの全体構想を定めるもの。地区計画の目標や地区の整備、開発及び保全に関する方針を定める。
地区整備計画	まちづくりの内容を具体的に定めるもの。「地区計画の方針」に従って、地区計画区域の全部または一部に、道路、公園、広場などの配置や建築物等に関する制限などを詳しく定める。

▲地区計画の構成



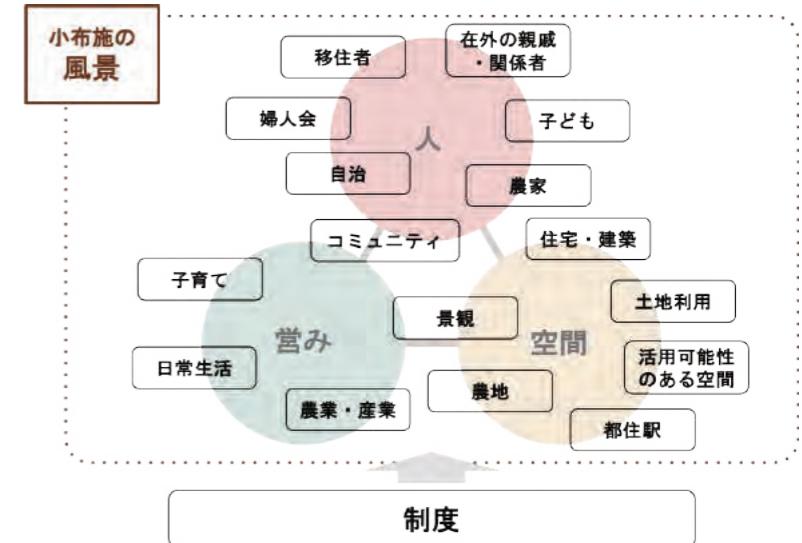
▲地区計画等の種類

将来像を考えるキーワード『風景』

これまで本ラボでは、様々な切り口から小布施を調査・分析し、活動を展開してきました。これらの切り口は、「人」「営み」「空間」、そしてそれらを支える「制度」に整理されます。「人」「営み」「空間」には、様々な要素が含まれますが、それら一つ一つが小布施の『風景』をつくっている、と考えられます。

小布施町の将来像を考えるにあたっては、これらの要素について、実態を把握し今後のあり方を考えいくと同時に、全体としての『風景』を考える視点も大事だと考えています。そのため、小布施町の『風景』に欠かせないものは何か、未来に残したい『風景』とは何か、地域の皆さんと一緒に考え、町の将来像を検討していきたいと思います。

その試みとして、2020年度には地域の皆さんから写真を募って未来に残したい風景を集めました（詳しくは30ページへ）。以下に、そこで集まった写真の一部を紹介します。



▲本ラボのこれまでの切り口と、小布施の『風景』の関係



子どもの頃の思い出をたどる



小布施の歴史をたどる



小布施をいろどる自然



暮らしをふむ

2

これまでの活動を 振り返る

東大先端研・小布施町コミュニティ・ラボは、2016年の活動開始から、調査や企画・実践による地域の皆さんや役場の方との交流・意見交換、それらを踏まえた将来像の検討など、様々な活動に取り組んできました。本章では、これまで本ラボが行ってきた活動とそこから得られた成果と課題を年度ごとに振り返ります。



2016 年度

2014年に東京大学工学部都市工学科の授業で行われた地域調査をきっかけとして、2016年に本ラボが設立され本格的な活動がスタートしました。コミュニティの維持・再生に向けてまず行われたのが空き家の実態調査です。町内全域にわたって行われたこの調査は小布施町の課題を認識する貴重な機会となりました。



▲都市工学科の授業の様子

6月



10月



11月

空き家外観調査

農村コミュニティの再生・活性化へ向けた糸口として、町内全域を対象に空き家の実態調査を行いました。調査を経て、今後の空き家等の既存ストックの活用に向けた課題が見えてきました。

【実施日】2016年10月22日～26日, 11月18日～20日

【調査対象】小布施町内全域

【調査手法】外観目視・ヒアリング

【結果】町内全域で253戸の空き家を確認した



▲集計作業の様子

町の課題と空き家調査

今後人口減少や少子高齢化が進む中で、町の機能を維持し地域として持続させていくためには、むやみに新しい開発をするのではなく、既存のストックを活かしつつ、新規居住者を受け入れていくことが求められます。小布施町は以前より移住・定住を促進する取り組みを行っていましたが、その中で希望者に紹介できる物件が少ないという課題があがっていました。

既存のストックを活かし、農村コミュニティを再生・活性化するためには、まず資源になり得る空き家や遊休施設、低・未利用地の存在状況を調べ、広く活用できる状態にする必要があります。

そこで、本ラボでは町内全域を対象に空き家調査を実施し、その実態と活用に向けた課題を把握しました。

調査概要

数人ごとの調査班に分かれ、大字の区域ごとに徒步で回りつつ、①自治会長へのヒアリング、②現地での目視調査、③近隣住民の方へのヒアリングを実施しました。

8日間にわたる調査となり、役場職員の方、地域おこし協力隊の方、東京大学工学部都市工学科の学生など多種多様な方の協力もあり調査が実現しました。

顕在化する新たな課題

調査の結果、空き家と考えられる253戸が判明し、空き家率（調査で推定された空き家数を、課税台帳による専用住宅と併用住宅の合計数（2018年）で除した値）は5.4%でした。空き家率の全国平均は13.5%（総務省統計局「平成25年住宅・土地統計調査」より）であり、小布施町の空き家率は全国的に見ると低い値でした。一方、人口減少や少子高齢化に伴い、今後空き家は増加していくと考えられるため、将来を見据えた施策が重要となります。

さらに、空き家と推定された物件について、近隣住民へのヒアリングを元に、所有者が把握できているか、所有者（あるいは所有者に繋がる情報提供者）に連絡可能かどうかの二点に関して整理しました（下表）。結果、253戸中165戸の空き家について所有者が分からず、しかも所有者につながる情報提供者とも連絡がつかない状況であることが分かりました。所有者不明の空き家の問題についてはすでに全国各地で顕在化しているものではありますが、自治会での結びつきの強い小布施町においても、同様の課題が浮き彫りとなりました。

所有者		
	あり	なし
連絡手段の有無	あり	19戸
	なし	39戸
		30戸※
		165戸

※所有者は分からず、しかも所有者につながる情報提供者とも連絡がつかない状況であることが分かりました。

▲空き家所有者に関する状況

2017 年度

前年度の空き家実態調査を踏まえ、空き家の活用を視野に入れた地域の将来像を考えるためにあたって、モデル地区として都住地区を活動の主なフィールドに選定しました。

また同時に土地利用や人口といった現状分析や、住民の方々へのヒアリング調査も行い、地区への理解を深めました。



▲地域の皆さまへの報告会の様子

なぜモデル地区を都住地区にしたの?

地区をフォーカスする理由

1. 課題解決に向けてアプローチしやすい

小布施町は観光地としての中心部と、暮らしの拠点である周辺農村部ではまち並みが異なり、抱える課題も違うと考えられます。エリアを絞ることで課題が明確になり、アプローチがしやすいと考えました。

2. 解像度を上げて他地域へ応用する

小布施町全体の計画は定められていますが、さらに細分化された範囲、特に農村部においてはその計画は十分とは言えません。町全体に対する先駆的なモデルが必要だと考え、小さな範囲にすることによって活動の解像度を上げ、他の地域への応用が可能な知見を得ることにしました。

都住地区を選んだ理由

1. 農村部の課題を解決するため

小布施町中心部では修景事業に代表されるよう、歴史や文化に着目したまちづくりが行われてきましたが、農村部ではあまり行われてきていません。特に、開発の制限があり、制度が複雑化している市街化調整区域での今後のまちづくりのあり方を考える必要があると考えました。

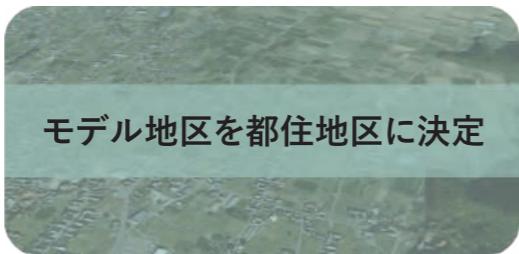
2. 農業を取り巻く環境の変化

現在、農家の高齢化や産業構造の変化が進み、農業を取り巻く環境が変化しています。そこで、農業を生業の中心としてきた地域コミュニティのあり方を再検討する必要があると考えました。

COLUMN #01

10月

地域調査



12月

小布施会議への参加



2月



生活実態ヒアリング調査

都住地区(六中矢水エリア)において、どのような営みや繋がりが地域の個性を形づくっているのかを住民視点で探るとともに、地域の課題や将来像を掴むべく、ヒアリング調査を行いました。

【実施期間】2017年12月～2018年2月

【実施場所】都住地区各地

【調査手法】ヒアリング

【参加人数】12名



▲ヒアリング調査の様子

地域の個性は日々の暮らしのなかに

地域には、それぞれ受け継がれてきた歴史、文化があり、人々はそのなかでコミュニティを形成しながら、固有の暮らしの風景を作り上げています。こうした地域の個性は将来にわたって守られるべき大切なものです。

そこで、地域の将来像を描くにあたり、都住地区の個性を形づくっている地域性、すなわち「都住らしさ」を捉えるとともに、地域の課題を明らかにすることを目指しました。そして、この地域性及びそれを形づくる営みや繋がりは、日常生活のなかに現れると考え、様々な立場の方を対象に生活実態についてのヒアリング調査を実施しました。

6回にわたり調査を実施

ヒアリング対象者は、企画政策課定住交流係および、主任研究員の大宮透氏(当時)に紹介していただきました。幅広い属性の方々にお話を伺うことができました。

実施日	自治会	人数	属性
2017/12/17	中子塚	4名	男性、農業従事
	六川	1名	男性、農業従事
2018/2/3	六川	1名	男性、農業従事、子育て中
	六川	1名	女性、新規就農で移住
2018/2/4	矢島	3名	女性、子育てを経験
	矢島	2名	女性、結婚を機に移住 男性、高校生



▼ヒアリング調査の様子

2018 年度

前年度に引き続き都住地区の現状を把握すると同時に、将来像を構想するために地域の皆さまとの意見交換の場を開きました（コミュニティ勉強会・都市計画勉強会）。そして、こうした活動を通じて課題認識された土地利用について、本格的な調査を行いました（土地利用現況調査）、将来像を考えるために地区全域にわたるアンケート調査も行いました（集落全員アンケート）。



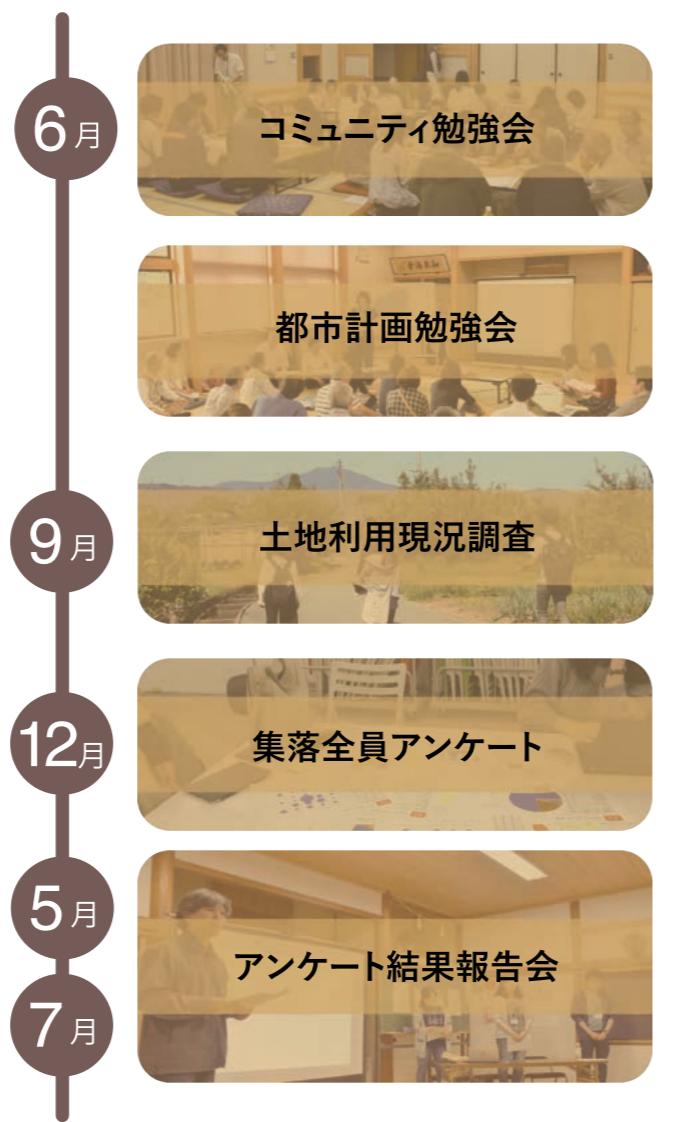
▲都市計画勉強会の様子

3年間続けた月報の発行

「東大先端研・小布施町コミュニティラボ」が一体何者なのか、何をしているのか、何を目指しているのかということを地域の皆さんにより深く知るために、2018年2月から毎月都住地区（2021年4月からは小布施町全域）で月報を発行しています。

2021年6月発行の月報で、なんと39号目となりました。月報では、本ラボの活動のお知らせのほか、普段のミーティングの様子や、本ラボメンバーによる小布施訪問記など様々な情報を発信してきました。月報を読んで、本ラボの活動に少しでも関心や親しみを持っていただけたら幸いです。

これからも地域の皆さまとの繋がりを絶やさぬよう、毎月発行して参ります。ぜひお楽しみください。



COLUMN #02

コミュニティ勉強会

小布施町において、自治会の集合体の「コミュニティ」という組織単位が担える役割について、住民の皆様とのディスカッションを通して考えました。

【実施日時】2018年6月1日18:00~19:30

【実施場所】六川公会堂

【実施形式】レクチャー・ディスカッション

【参加人数】27名（第7コミュニティの役員の皆さん）

自治会と「コミュニティ」

小布施町には、27の自治会と、地域特性の尊重、助け合いと連携、自立性の強化などを目的に組織された、自治会の集合体としての「コミュニティ」が存在します。この「コミュニティ」に関して、自治会と役員も重複しており不要ではないか、という意見があり、地域の中ではその存在意義について疑問が生じています。一方で、長期的な視点では、人口減少・少子高齢化により自治会の担い手が減少することが予想されています。一つの自治会では立ち行かなくなつた時に、コミュニティとして複数の自治会で連携し、地域を維持していくことができると考えられます。

そこで、自治会が基本単位となっている小布施町で、「コミュニティ」がどのような役割を持つことができるのか、その可能性を探ることを目的に、第7コミュニティ勉強会の時間の一部を活用し、議論をしました。



▲ディスカッションの様子

部会ごとにディスカッションを実施

勉強会では、まず東大チームからレクチャーを行い、「コミュニティ」が担えそうな役割として、「効率化・合理化」、「地域のニーズを実現するための手段」の2つをあげ、事例を紹介しました。

その後、環境部会・生活安全部会・福祉部会・教育部会の4つの部会に分かれ、「コミュニティ」の可能性についてディスカッションを行いました。

ディスカッションの成果▼



今後の「コミュニティ」の役割

議論では、「自治会でできていないところは町が担っている」という意見があり、町が担っている役割が大きいことが分かりました。しかし、今後も小布施町の負担増加が見込まれる中、自治会をサポートする「コミュニティ」の必要性は強まると考えられます。

また、子供を対象とした活動は「コミュニティ」単位が求められるのではないか、河川や駅、土地利用などは「コミュニティ」で共同化できる可能性がある、といった意見も出了しました。

さらに、当初想定されていた形とは異なりますが、テーマ型まちづくりの主体として、「やりたいことがある人がコミュニティの範囲で集まる」という方向性も考えられます。中心となる人物の必要性はありますが、「コミュニティ」単位の活動の展開可能性はあると考えられます。

2018 年度

都市計画勉強会

地域の実情に合わせた制度の提案を視野に入れ、地域の皆さんに、地域に適用される都市計画制度の概要や意図を理解していただくため、小布施町における現行の法制度や計画の整理をしました。

【実施日時】2018年6月16日15:00~16:30

【実施場所】六川公会堂

【実施形式】レクチャー・ディスカッション

【参加人数】22名(東京大学の学生4名を含む)



▲勉強会の様子

勉強会の意義

小布施町では計画的市街地整備や景観保全の面から町域の大部分を市街化調整区域に設定し、無秩序な開発を制限しています。一方、2006(平成18)年には、農村集落の活性化を目指し、既存の集落エリアでの開発が大幅に認められるようになりました。

しかし、この制度を設けてから10年以上が経過しているため、改めて制度の概要や意図を地域の皆さんと共有し、また今後の新たな地域のあり方に合った制度の提案に向けて地域の将来像について意見交換をする目的で、勉強会を開催しました。

小布施町にかかる4層の制度

①市街化区域/市街化調整区域の区域区分(1971)

市街化調整区域では、開発が抑制され、原則新たな建築が認められません。

②農業振興地域の指定(1970)

農業振興地域において、農用地として指定された農地では、原則農地以外の土地利用ができません。

③開発許可基準の緩和の指定区域の設定(2006)

指定区域内では、非農家でも農村集落内に新規住宅を建てられます。

④景観形成重点地区(2006)

③の指定区域内に新規住宅を建てる際に、景観に配慮する、などの付帯条件が定められています。

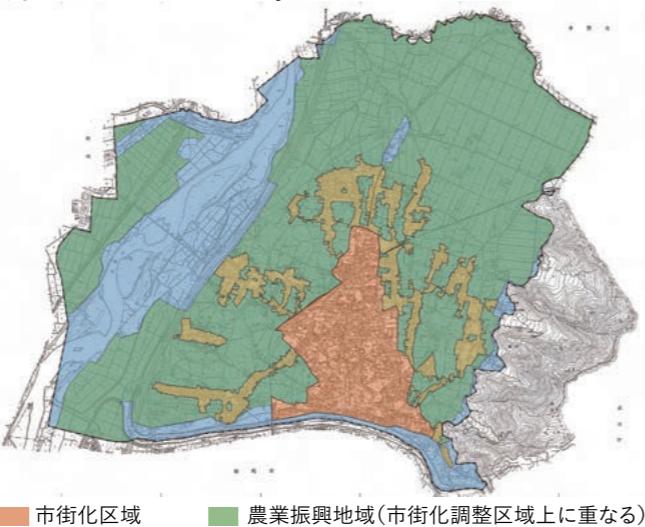
▲各制度の説明

これからの制度に向けての示唆

勉強会では、高倉明子氏・塚本哲氏(長野県建設部都市・まちづくり課)、畔上敏春氏(小布施町建設水道課)より、小布施町の土地利用や開発に関する制度について説明いただきました。

参加者からは、農業振興だけでなく商工業等の開発も望む声がありました。農村集落部における今後の開発のあり方について、農業や小布施町らしい農村景観を守りつつも、産業構造の転換に合わせた将来像を検討していく必要があると言えます。

また、空き家活用についても活発に意見交換がなされ、無秩序な開発を抑制しつつも地域活力の維持を図るために空き家活用が必要だととの共通認識を持つことができました。



▲小布施町の都市計画制度区域図(本ラボ作成)

土地利用現況調査

活動の中で、維持の難しくなる農地を宅地化できないかという意見を頂きました。集落内の農地や未利用地がどれくらいあるのか、地域の土地利用の現況を把握することを目的に調査を行いました。

【実施期間】2018年9月21日(金)~9月23日(日)

【調査手法】目視調査

【対象地区】都住地区

【結果】計155か所の土地の現況を確認した

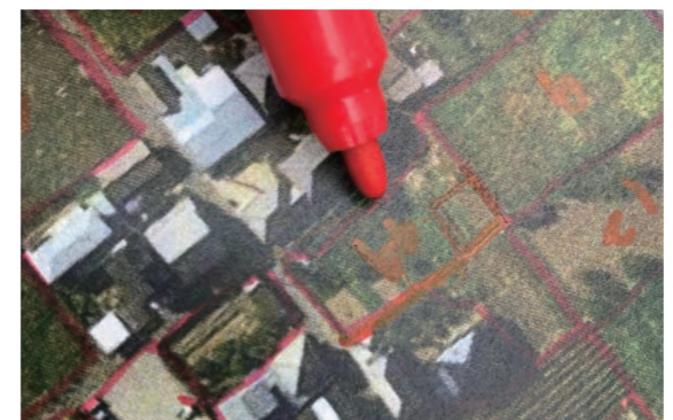


▲現地調査の様子

土地利用の現況をこの目で見る

2016年度に実施した「空き家外観調査」、2018年度に実施した「コミュニティ勉強会」「都市計画勉強会」、またそれまで行ってきた聞き取り調査などをして地域の皆さんから土地利用に関する多くの意見を頂きました。「耕作放棄地が多い」、「農業は後継者が全然いない」などを地域の問題点として挙げる方多くいらっしゃいました。

しかし土地利用の現状は実際の様子を見ないと把握できません。例えば「農振農用地」(=農業振興地域において定められている農用地)と定められていても経営農地なのか、自家用の農地なのかは現状を見ないことには分からず、そしてそれは今後の「農業」のあり方に大きく関わってくると言えるでしょう。そこで、現在都住地区の土地がどのように利用されているのか、実際に目で見て把握することにしました。



▲航空写真を用いて農地の番号付けを行った

目視の限界も感じた調査結果

用途(農地/山林・原野/駐車場/未利用/その他)、接道条件(2m未満/2m以上4m未満/4m以上)、敷地形状、公道からの高低差、敷地内の傾斜の有無などの共通項目と、用途ごとのより細かい判断基準に基づいて調査を行いました。

調査を通して、都住地区の未利用地の存在などが確認できました。また、家庭菜園をやっている人が多いことや、空閑地に農業の設備が残っている場合があること、今後ソーラーパネルが増えてきそうなことなど、多くの細かい気づきがありました。

しかし、目視での調査である以上、接道のない土地については確認できず、各項目の内容も調査員の判断に委ねられ、所有者の意思に反する可能性があるという限界も感じられました。

また、「未利用地」であることを確定するには、所有者の意向の把握や所有者情報を参照することが必要であり、そのような「意向」や「思い」を調査するために、次項で述べる集落全員アンケートを行うことにしました。

エリア	未利用地	農地	その他
市街化区域内	8ヵ所	11ヵ所	2ヵ所
市街化調整区域内	20ヵ所	50ヵ所	4ヵ所
農業振興地域内	10ヵ所	48ヵ所	2ヵ所

▲調査結果の一部

2018 年度

集落全員アンケート調査・結果報告会

具体的に地域づくりを実践していく前に、地域の皆さまの「今の思い」を丁寧に把握する必要がありました。そこで、「地域構成員全員の思いを聞くこと」を目的としたアンケートを実施しました。

【実施期間】2018年12月～2019年2月

【調査手法】アンケート

【対象地区】中子塚自治会、清水自治会

【結果】地区内200名、地区外45名の回答を得た



▲アンケート分析作業の様子

地域構成員全員の思いを聞くアンケート

地域の将来像を描くにあたり、現在だけではなく将来の地域の担い手の意見を取り入れることが必須であると考えています。また、土地や建物に関しては、地区外に住む親族の意向や意思もその維持について大きく関わってきます。

以上の理由から、「中子塚自治会・清水自治会内に住む中学生以上全員、また地区外に住む親族」を対象としたアンケートを実施しました。

アンケートは、世帯主の回答を求める世帯票と、中学生以上の世帯構成員全員の回答を求める個人票を配布しました。

▲実際に配布したアンケート

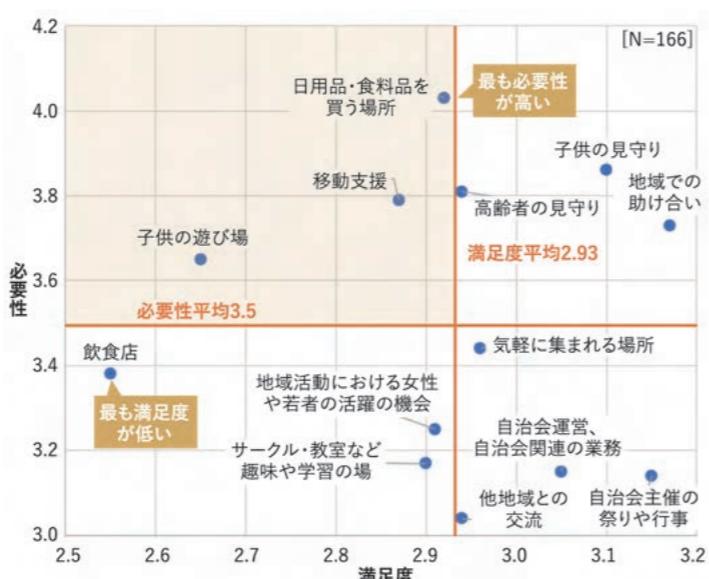
▷ アンケート回収数

	回収数	回収率
地区内	世帯票 79	84.0%
地区内	個人票 200	83.7%
地区外	世帯票 16	28.6%
地区外	個人票 45	46.4%

地区内にお住まいの方々は、回収率80%以上と、非常に多くの方にご協力いただきました。

▷ 日常生活上の課題

日常生活上の様々な要素について必要性・満足度を分析した結果(右図)、日用品・食料品を買う場所が最も必要とされていること、飲食店が最も満足度が低く、特に20～30代の女性と10代の男女が必要であるが不満だと感じていることが分かりました。



▲地域に必要なものを必要性と満足度から分析した図
必要性が高く、満足度が低いものは喫緊の課題と言える

集落全員アンケートの各自治会での結果をお伝えすることを目的とした報告会を開きました。同時に交流会も開催し、本ラボメンバーと地域の皆様との間で深く情報共有を行うことができました。

【実施日】中子塚自治会:2019年5月17日(金)

清水自治会:2019年7月7日(日)

【実施場所】中子塚公会堂、清水公会堂

【参加人数】中子塚自治会:24名

清水自治会:32名



▲清水地区での報告会の様子

自治会の皆様に向けた報告会

集落全員アンケートを実施した中子塚自治会・清水自治会の皆様に向けて、それぞれ報告会を開きました。集落全員アンケートの結果報告や質疑応答を行い、その後に各自治会の主催による交流会が開かれました。

「中学生以上全員」が回答対象であったことから、報告会にも非常に多くの方に参加いただきました。これまでの活動ではあまりアプローチできていなかった層の皆さんにも参加いただき、繋がりを持てたことは大きな収穫になりました。

質疑を通してより交流を深める

質疑の時間や交流会で、アンケートの設問に絡んだ内容のお話を多くの方から伺えました。特に「農業」については多くの意見が集まり、地域の皆さんにとって関心が高いテーマであることが再確認できました。

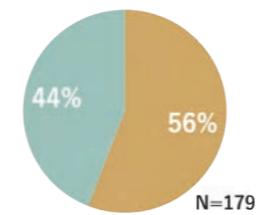
また、「過去から今の傾向や、将来予測も知りたい。そのうえで今後のことを話し合いたい」など、新たな視点での調査を求める意見や、「今後の活動に期待したい」、「できることがあれば協力していきたい」などのお声もいただきました。

▷ 農業継承の課題

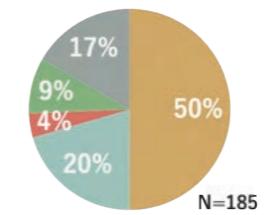
▷ 農業継承の課題

農業に関しては、半数程度が後継者がいないと回答した一方で、農業の継続を希望する方が多く、今後どのように農業を継承していくべきかが大きな課題として見えてきました。

▼農業の後継者の有無



▼農業の継続意向

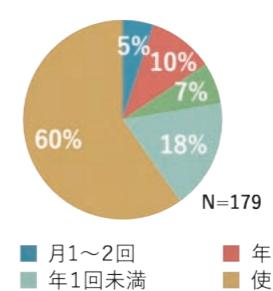


■ 親族の後継者がいる
■ 後継者はいない

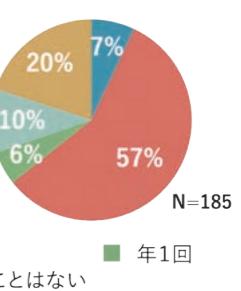
▷ 地域資源の活用の課題

コミュニティセンターは「使ったことはない」という方が60%と、地域の資源としてあまり使われていない実態が明らかになりました。公会堂は、年に数回使う方が最も多く、主に自治会活動で使われていました。

▼コミュニティセンターの利用頻度



▼公会堂の利用頻度



2019 年度

これまでの調査結果を踏まえ、2019年度は様々な実践的な活動を行いました。「都住の縁側」では低利用空間を活用するイベントを開きました。また、「ふらっトーク」では住民の方同士の対話の場を設け、実現可能な将来像についての共有が行われました。その他にも地区計画に関する検討や、当時台風災害に見舞われた小布施町のボランティアとして復旧活動をしました。



▲「都住の縁側」での活動の様子

台風被害を受けて

2019年10月12日から13日にかけて日本に上陸した令和元年東日本台風(台風19号)によって、千曲川が氾濫し、小布施町でも住宅や田畠が浸水するなどの甚大な被害が発生しました。

本ラボでも、直後に予定していた活動を延期し、約1ヶ月後の11月23日、ボランティアで復旧作業の手伝いをしに現地に向かいました。現地では、収穫間近のりんごなど多くの農作物が被害を受けてしまっており、それらの片付けを微力ながらお手伝いさせていただきました。

この台風被害を機に、小布施町ではハザードマップの見直しが行われ、2020年3月23日に松川の浸水想定区域が加えられたハザードマップが公表さ



COLUMN #03

れました。また、住民の皆様の防災意識の高まりも感じられました。今後も、この被害を風化させず、災害リスクへの対処を考慮しながら、町の姿を描いていきます。



▲復旧作業の手伝いの様子

地区計画勉強会・意見交換会

より地区の実情に合った計画策定が可能な地区計画の制度を用いることを検討し、行政との意見交換を行いました。「集落地区計画」策定という今後の方針決定に繋がる活動となりました。

【実施日時】 2020年1月17日(金)15:00~17:00

【実施形式】 意見交換

【実施場所】 小布施町役場2F

【参加人数】 9名(県・町職員と東大チームメンバー)



▲学内地区計画勉強会の様子

継続的な対話の必要性に気づいた学外意見交換会

中子塚・清水自治会で実施した集落全員アンケートや「都住の縁側を作ろう!」の開催を踏まえ、2019年11月からアクションプランの策定に向けた準備として、地区計画について学内で勉強会・意見交換会を行いました。

学生間で複数回の勉強会を実施し、地区計画の制度内容や現行の他制度との違い、他地域の事例等を整理し、都住地区への適用可能性を検討しました。

そして、それを踏まえた意見交換会を通じて、市街化調整区域かつ農業振興地域であり、制度が重層的に存在する都住地区においては、集落地区計画の策定が適しているのではないか、という方針が示されました。

学内勉強会・意見交換会を踏まえ、2020年1月17日に小布施町役場で長野県・小布施町のまちづくりに携わる職員の方々との意見交換会を行いました。学内勉強会・意見交換会の内容に対して行政視点でのご意見をいただき、都市計画法第34条11号(開発許可条例)の使用や景観条例制定の経緯を踏まえた上で、もう一歩まちづくりを進めるために地区計画が必要という認識を共有することができました。

さらに、地区計画策定に向けた具体的な話し合いの中では、住民の方々のニーズや将来像、農政上の必要性等を丁寧に調査・分析した上で、基本方針や対象エリアを明確にする必要があるとのご指摘をいただきました。その後のふらっトーク開催等の住民の方々の多様な意見を伺う活動や、行政との継続的な話し合いに繋がる場となりました。

地区計画とは?

詳しくは、6ページへ!

地区計画等 …ある一定のまとまりを持った「地区」を対象に、その地区の実情に合ったよりきめ細やかな規制を行う制度。

集落地区計画… 地区計画等の5種類のうちの一つで、集落地域において営農条件と調和のとれた居住環境の確保や適正な土地利用を図る場合に用いられます。

2019 年度

都住の縁側を作ろう!

～入門編～

現状あまり活用されていない都住コミュニティセンターを活用し、プレイスメイキング「都住の縁側」を実施しました。入門編ではコミュニティセンター活用に向けた企画や準備を行いました。

【実施日時】2019年9月1日(日)10:30～15:30

【実施場所】都住コミュニティセンター

【実施形式】ワークショップ

【参加人数】11名(うち、子供6名)

都住コミュニティセンターを活用した、“居場所づくり”を目指して

中子塚自治会・清水自治会で実施した集落全員アンケートでは、都住地区の低未利用地の増加の実態や、「都住駅周辺の賑わい」「家でも学校でもない居場所」などの要望、コミュニティセンターがほとんど利活用されていない実態などが明らかになりました。そこで、都住コミュニティセンターの日常的な利用と、地域内の他の低未利用空間の活用イメージを提示することを目指し、都住コミュニティセンターを活用した人の集まる空間づくりを手掛けました。

都住地区の皆さんにも、講師=「MyStar(マイスター)」としてご参加いただき、一緒にプログラム内容を考えていきました。

入門編プログラム

コミュニティセンターの活用に向けて、当日立ち寄って下さった子供たちと一緒に「学びの場」をデザインしました。

企画内容	Mystar
そもそもコミュニティセンターとは?	松本さゆみさん
小布施の郷土料理を学ぼう!	牧けい子さん 寺島康子さん
コミュニティセンターを綺麗にしよう!	松本さゆみさん
コミュニティセンターで何ができるかな?	本ラボメンバー

▷ そもそもコミュニティセンターとは?

どのような施設なのか、これまでどのような使われ方をしていたのかを学びました。

▷ 小布施の郷土料理を学ぼう!

お屋には小布施の郷土料理である、おやき、ニラ饅頭、りんごゼリーを参加者で一部手作りし、味わいました。地域に伝わる食文化を学ぶきっかけになりました。



▷ コミュニティセンターを綺麗にしよう!

地元の人からコツを教わりながらコミュニティセンターの掃除を行いました。

▷ コミュニティセンターで何ができるかな?

コミュニティセンターで何がしたいか、そのためには何が必要かを話し合いました。りんご箱と竹から椅子や机などを作り、実際に手を動かしながら考えました。

使われなくなったりんご箱の アップサイクル



子供の居場所へのニーズを認識

未就学児～小学校低学年の子の参加が多く、一人では遊びに行かせられない子供たちが安心して遊べる居場所のニーズが明らかになりました。

コミュニティセンターの使い方としては、縁側から出入りが可能になると、利用者が増えることが分かった一方、センターの開館時間など、子供の遊び場になるまでの課題点も明らかになりました。

～実践編～

「都住の縁側を作ろう!入門編」で掃除を実施し使えるようにした都住コミュニティセンターを、実際にどのように利用できるかを地域の皆さんと考え、実践しました。

【実施日時】2019年9月21日(土)10:30～16:00

【実施場所】都住コミュニティセンター

【実施形式】イベント

【参加人数】44名

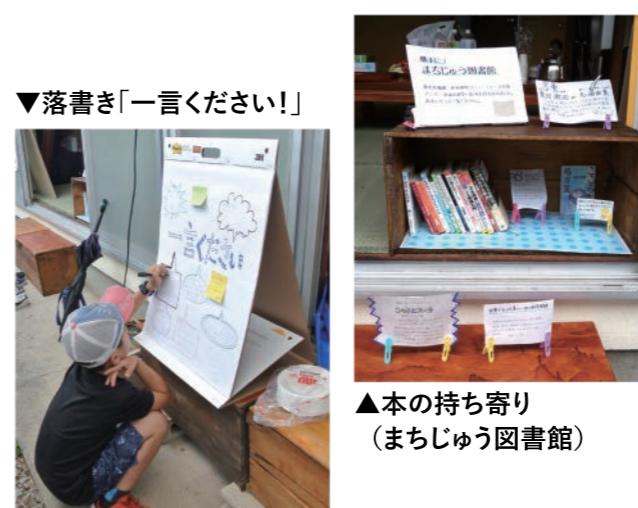
実践編プログラム

流しそうめん、トランプや古書(まちじゅう図書館)、落書きやシャボン玉など入門編でたいたアイデアを元に、コミュニティセンターで楽しめる様々なコンテンツを準備し、実践しました。

企画内容	Mystar
縁日の準備をしよう	本ラボメンバー
流しそうめんチャレンジ	吉田富雄さん
コミュニティセンターで何ができるかな?	本ラボメンバー

▷ 縁日の準備をしよう

コミュニティセンターでどのような活動ができそうか考えながら、りんご箱やテントをセッティングしました。



▷ 流しそうめんチャレンジ

住民の方にお借りした竹を使い、子供たちに足場を組んでもらいました。そうめんだけではなく、タピオカ等も流して皆さんで楽しみました。

▷ コミュニティセンターで何ができるかな?

コミュニティセンター内では私たちが持ち寄った本の展示を行ったり子供たちが自由に遊ぶなどし、利用の可能性を探りました。



▲流しそうめん

多世代交流の場としての可能性

入門編でも参加していただいた子育て世代の他にも、老若男女幅広い層の方々が参加してもらいました。地域の方との会話の中でも、地域の中で知人同士で集まりたいと考えている方が多いことがわかりました。

また、小学生以下の子供たちと年配の方が自然とコミュニケーションする姿も見られ、多世代交流の場としての可能性を感じられました。



▲皆さんで楽しく談笑

ふらっトーク ~都住地区の「今」と「未来」~

地域の皆さま同士の対話の場として、男性編・女性編を実施し、様々な思いを詳細にヒアリングしました。得られた知見を活動に活かすと共に、今後も継続的に地域の皆さま同士の対話の場を設けます。

【実施日時】2020年2月8日(土)

13:30~15:30、18:00~20:00

【実施場所】六川公会堂

【実施形式】ワークショップ・ワールドカフェ方式

【参加人数】男性11名、女性14名

都住地区の「今」と「未来」を考える

これまでに行なってきた「集落全員アンケート」や「都住の縁側」などの質問紙による調査や実践的なイベントでは、得られた結果の背景にある理由や、地域の皆さまにとって望ましい都住地区の将来像については分からぬという課題点が見られました。

そこで、地域の皆さま個人個人が持つ地域に対する思いや、思い描く理想の将来像を、地域の皆さま同士で共有してもらうことを目的として、都住地区の「今」と「未来」を考える対話の場を企画しました。



▲模造紙を用いた議論の様子

ふらっトークの様子

「農地の今後」「身近な困りごと」「自治の意義」「理想の都住駅」という4つのテーマについて、地域の皆さまに議論していただきました。

"ふらっと"立ち寄って気軽に"トーク"ができる場を作るために、今回は男性編と女性編で開催時間を分けました。女性編では14名、男性編では11名の方にお越しいただき、初めて本ラボのイベントに参加される方もいらっしゃいました。



▲ワールドカフェ方式による議論の様子

今回は、20分ごとに少人数グループを入れ替え、様々なテーマを議論するワールドカフェ方式でふらっトークを行いました。そのため参加して下さった方には、全てのテーマについて議論に参加していただきました。また各グループには東大チームのメンバーが1人付き、司会進行などを行いました。

ふらっトークは終始話しやすい雰囲気の中で行われ、話した内容は隨時模造紙に記入しながら、議論を行いました。模造紙が文字でいっぱいになるほど多くの意見や議論が出たことが印象的でした。

ワールドカフェとは?



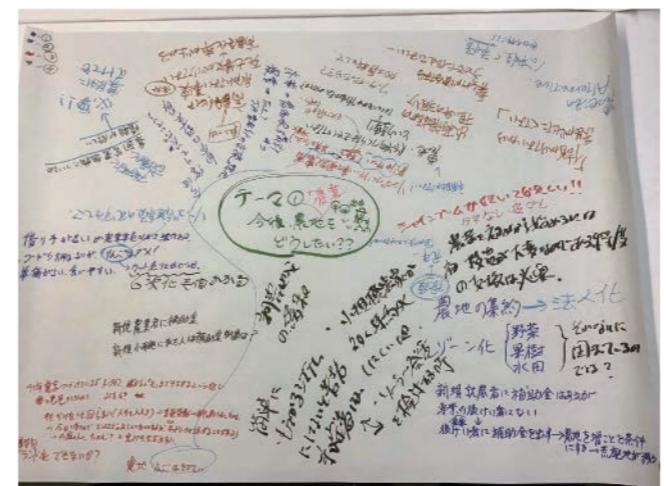
まるでカフェのような雰囲気で対話を通じて多様な背景を持つ者同士が交流する、ワークショップの形式の一つです。模造紙を囲みながら気楽な雰囲気で議論をし、テーブルシャッフルによって参加者の声をリレーしていきます。これにより、その場にいるほぼ全員の声を集めることができます。

各テーマでの議論

▷「農地の今後」

これは、特に強い関心を集めたテーマでした。女性編では農業を続けたい意見とその他の土地利用への転用を考える意見が見られました。近年高まる防災意識を反映し、農地の防災的役割を守るために耕作を続けたいと言う意見も挙がりました。

一方男性編では、課題として労働者不足があげられ、農地の集約や新規就農者の呼び込みについて議論が行われました。いずれも実現のためには体制を構築する必要があるものの、現状のままでは厳しいという意見が出ました。



▲たくさんの意見が並んだ模造紙(農地・男性)

▷「身近な困りごと」

現在は不便は少ないが今のままでは将来さらに不便になってしまう、という問題意識を多くの方が持っていることが分かりました。こうした地域で共通した課題については、今後解決の方向に向けた更なる話し合いが必要になると思います。

▷「自治の意義」

前提として自治が必要である一方、人口減少に合わせた規模・体制の再構築の必要性が議論されました。特に若年層の参加者を増やすために門戸を開いた自治会のあり方を検討する必要がある、という声が多く見られました。

▷「理想の都住駅」

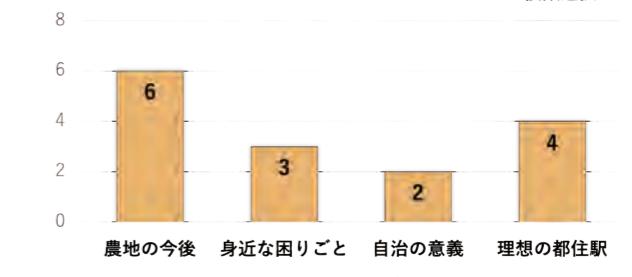
以前より寂しくなったという声が多い一方で、駅近くのコミュニティセンターのデザインを工夫し利用者を増やせないか、という建設的な議論も見られました。また、ふらっトークで初めて意識的に都住駅を考えたという方もいたため、地域資源に目を向けてもらうきっかけというふらっトークの意義を認識しました。

議論の場へのニーズが顕れた結果

ふらっトーク開催後に行ったアンケートでは、次回以降のふらっトークの開催を希望する声が多く見られ、こうした地域の皆さま同士の意見交換の場へのニーズがあることが分かりました。また複数の方から、テーマの意見を共有し合うだけでなく、解決に向けて話し合いたいというご意見を頂きました。

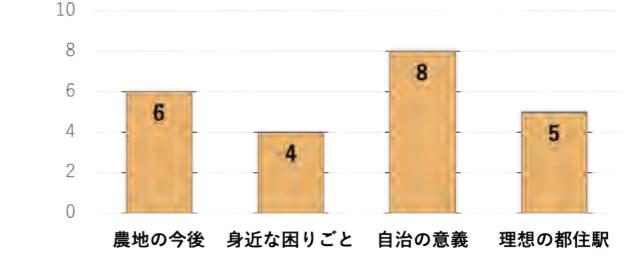
男性(N=11)

複数選択



女性(N=14)

複数選択



▲アンケート「特に関心の高かったテーマは?」の回答

2020年度は感染症流行下により実施できませんでしたが、こうした誰でも参加できる議論の場を作る活動を継続していくとともに、回を重ねる毎に解決案などのアウトプットを意識したテーマ選択をしていくことを検討しています。

2020 年度

2020年度はCOVID-19の流行により活動の制限を余儀なくされました。しかし、そのような中でも町内の学生とリモートで協力しながら、小布施町の将来像を鮮明に描くべく様々な視点に基づく詳細な調査を行いました。小布施町の課題となっている農地・宅地の調査(GIS・農地調査、分家住宅調査)や、小布施町に特有な通り門の調査、写真展・シンポジウムなども開催しました。



▲東大チームでのオンラインミーティングの様子

コロナ禍で生まれた、新たな協働のかたち

COVID-19の流行に伴い、従来のように直接東大学生が現地で調査をすることが困難となりました。そこで小布施町内の学生とリモートで協働し様々な調査や企画を行いました。



▲東大学生・小布施町内学生のオンラインミーティングの様子

COLUMN #04



▲小布施町内学生による現地活動の様子

東大学生は各々リモートで参加し、zoomやslackなどのデジタルツールを利用しながら町内の学生とコミュニケーションをとることで、オンラインでかつオンラインサイトな活動を実現することができました。



通り門調査

小布施町には「通り門」と呼ばれる特徴的な建築物があります。景観的にも空間的にも地域の重要な資源として活用する方法を探るべく、その分布や利用実態、成立過程を調査しています。

【実施日】外観調査:2020年9月3日,4日

アンケート:2020年9月下旬~10月

【調査手法】外観目視、アンケート

【結果】外観調査:185件

アンケート:76件回収/176件配布



▲小布施町の通り門

通り門と長屋門

通り門は、宮城県や栃木県など他の地域で見られる長屋門という建築と形式が類似しています。しかし、その成立過程については、水害との関係などが示唆されており、長屋門とは異なっているのではないかと考えられます。また、農家の長屋門は明治・大正期につくられ、現在では基本的に伝統的な建築として扱われるものですが、小布施町では近年でも通り門がつくられています。

このように、通り門は長屋門とは異なる建築物であると言えそうですが、そもそも「通り門」に定義はなく、あえて表現すれば「道路から敷地内への、半屋外の通路を持つ建築物」となるものの形状は様々で、「通り門とは何か?」というところから明らかにしなければなりません。

通り門は地域特有の風景の一部となっている一方で、近年では一部に空き部屋を持つものも増加しています。通り門を景観的にも空間的にも有効活用する方法を探るべく、その分布や利用実態と、そもそもこの通り門とは何なのか、定義、成立の歴史を調査しています。

小布施町内学生による現地調査

COVID-19の流行を受け、調査には小布施町内の学生に協力していただきました。まず東大チームがGoogle ストリートビューを用いて確認できる範囲

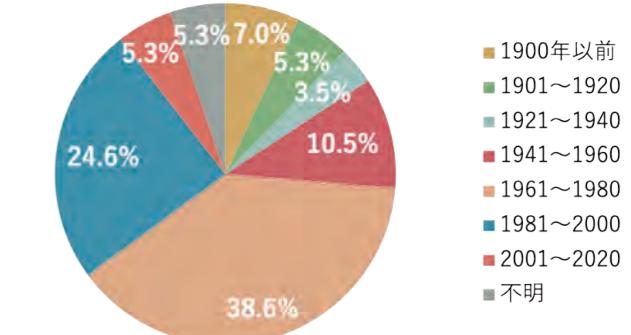
で町内全域の通り門と思しき建築物をリストアップし、それをもとに実際に目視の調査と、ストリートビューでは確認できない範囲の調査を町内の学生にお願いしました。この結果185件が通り門の特徴を持つ建築物として確認されました。

また、所有者が判明している176件について、所有者様にその利用状況や過去における利用についてのアンケートを実施し、76件の回答を得ました。

今後の展望

現在、外観調査とアンケートの結果を併せて集計・分析しており、下の図のように、長屋門についての研究報告の内容とは明らかに異なる興味深い結果も出てきています。

今後、さらなる分析やインタビュー等の追加調査を通じ、建築物が通り門たりえる条件・定義の導出、通り門の成立過程の解明をすべく進めて参ります。



▲通り門の建築時期
半数以上が1960年以降の建築であり、他県の長屋門の事例とは違う様子がみられる。

GIS・農地調査

まちの将来像を検討する際に、根拠となる客観的なデータは欠かせません。本ラボでは、町内学生と協働して小布施町の農地に関する情報を電子化し、地理情報システム(GIS)で分析できる環境を構築し、分析をスタートさせました。

【実施時期】2020年9月～

【調査手法】GISを使用した分析、外観目視

【調査対象】都住地区

データに基づく小布施の将来像の議論

本ラボでは様々な調査・イベントを通じて、地域の皆さんにとっての地域の課題・理想的な地域の将来像を調査してきました。小布施町の将来像を検討する際、最も重要なことは「どのような地域にしたいか」というイメージですが、同時に実現可能性の高い将来像も検討していく必要があります。

そこで、議論の土台として客観的なデータに基づいた現況把握や将来推計が重要です。特に「どのような地域にしたいか」を考えるためにには、まちの構造や土地利用、住環境を図化し、空間的に分析できる地理情報システム(GIS)が有用です。

本ラボでは、小布施町における将来像の議論の土台とするためのGISを用いた空間的なデータ分析と提案を行うことを目的として、空間情報の電子化・農地調査を実施し、GISで分析できる環境を整えていきます。

分析のためのデータ収集・整備

将来像を検討するためには、分析の元となるデータと、数理解析的な手法の選択を行う必要があります。2020年度は、必要となるデータの収集・整備に注力して活動を行いました。

▷既存データの電子化

まず、既に小布施町役場に紙で存在していた農地台帳の電子化を行いました。農地台帳には、農振法による農地の指定データが記載されており、その土地が、非農地、青地(※1)、白地(※2)のどれに当たるかが分かります。この指定状況は、土地利用に大きく影響するため、データを電子化することで、分析で使える形にしました。

この作業は、東大チームのメンバーがオンラインでGISの操作方法等、指導・サポートしながら、町内学生を中心に進めました。町内学生の皆さん、本当にありがとうございました。



▲小布施町内学生とのオンラインミーティングの様子

※1…農業振興地域内農用地区域内農地のこと。「農振農用地」または「青地」と呼ばれる。農地以外の利用が厳しく制限されている。

※2…農業振興地域内農用地区域外農地のこと。「青地」に対して「白地」と呼ばれる。農地以外の利用の規制が比較的緩くなっている。

GISとは？

GISはGeographic Information Systemの略称で、日本語では地理情報システムと呼ばれる解析ソフトのことです。デジタル地図のように様々な地図情報をデータで表現・管理し、地図上の距離や面積、数などを計算することができます。身近な例では、私たちのスマートフォンに入っている地図アプリもGISの一つです。



▷補足データの収集

次に、農地について補足的に現地調査を行いました。電子化した農地台帳に記録されている情報と実際の農地の使われ方を比較するため、現地に赴き1つ1つの農地の実態を目視で調査しました。



▲宅地に隣接する青地

その他に、建物・土地の用途の情報や浸水想定区域、開発規制の緩和が行われた区域(都市計画法34条11項)など、今後の分析に使うと考えられるデータを収集し、分析に使える形に整備しました。

データ化による分析精度の向上

農地台帳の電子化の結果、農地データの可視化が格段に行いややすくなりました。また、全体の俯瞰から区画ごとの詳細な検討まで、多様なスケールで小布施のまちの構造を見れるようになりました。

さらに、小布施に関する様々な情報をGIS上に統合することで、地図同士を組み合わせた分析也可能になりました。例えば、浸水想定区域にある建物の数や農地の面積など、一つのデータでは計算できなかった情報がGISを使うことで計算できるようになりました。

このような利点を活かして、農地の指定状況に着目して地区をA~Hの8つに類型化し、各類型ごとに将来の課題や可能性について考察を行いました。

例えば、青地が青地以外に囲まれている「青地囲み型」(Aタイプ)は、農住近接で集団性が低いものの、「生きがい・趣味としての農業」に適する特徴を持っています。

この類型の課題としては、消毒作業の際不便であることや、耕作放棄された場合に住環境の悪化等の問題に繋がりやすいことが挙げられます。また、この類型の可能性として、家庭菜園のような位置付けや住宅と農業が近接する景観の保護として残していくことが考えられます。

	青地	白地
囲み型	A 青地が青地以外に囲まれている 	B 白地が青地以外に囲まれている
飛び地型	C 	D
3411隣接型	E 	F
5m以上浸水想定地域内型 (浸水高は2020年版ハザードマップを参考)	G 	H

▲農振法の区域種別に着目した地区の類型化

これらの分析の結果は、長野県庁・小布施町役場職員が参加する意見交換会「都市計画キャラバン」で発表し、都市計画・農政の両サイドから、大変参考になる意見をいただきました。

2020年度は、得られている情報をもとに分析手法の検討を行う他、データ分析の視点から集落地区計画で提案できることを明らかにするために、集落地区計画の策定事例も調査しました。

2021年度以降は、さらに数字に基づいた客観的な分析を進めていきます。小布施の将来像の議論を実現性の高いものにしていくために、分かりやすく実用的な分析結果を示していきます。

分家住宅調査

分家住宅の建設に関する手続きや土地利用の実態を把握するため、分家住宅建設経験者を対象に調査を行っています。調査から得られた結果は、現状の制度の改善へ繋げていきます。

【実施時期】2020年9月～

【調査手法】アンケート・インタビュー

【調査対象】小布施町内の分家住宅建設者

【回答者数】アンケート:15件、インタビュー:1件



▲ 農地と住宅が共存する都住地区

市街化調整区域と分家住宅

都住地区は、ほぼ全域が市街化調整区域とされていますが、区域内に生活の拠点を持つ本家から世帯が分かれて、分家としての世帯が必要とする分家住宅は、建設が認められます。しかし、都住地区にかかる複数の制度により、分家住宅建設にも様々な手続きが必要となります。そこで、分家住宅建設に関する手続きや土地利用等の実態を把握し、制度の改善へ繋げるために、分家住宅建設経験者へのアンケート調査・インタビュー調査を行いました。

これまでの調査成果

アンケート調査は、2020年9月に、小布施町内でH18年以降に分家住宅を建設した方を対象に実施し、15件の回答を得ました。また、本ラボの活動に参加していただいている小布施町在住の学生のご家庭に協力いただき、2020年9月にオンラインインタビュー調査を1件実施しました。

2021年度以降、分家住宅建設経験者へのインタビューを進め、より詳細な実態を把握していきます。

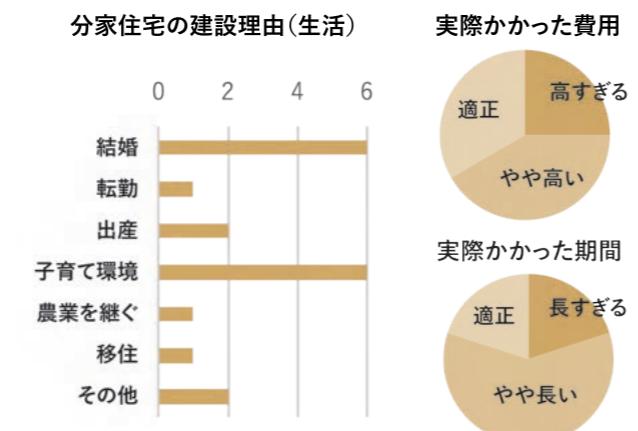


▲ オンラインインタビューの様子

調査から示唆された、今後の可能性

アンケート調査の結果からは、生活面から見た分家住宅建設の理由として、結婚や子育てが多いことや、分家住宅建設の手続きに想定より時間や費用がかかり、住民の負担となっていること等が分かりました。これから、制度を整え、分家住宅建設に関する手続きを簡易化することで、若い世代の定住に繋がる可能性があることが示唆されました。

また、インタビュー調査では、分家住宅の建設地が、周辺の環境のみでなく農地の作物等も考慮して決められていることが分かりました。このことから、農地を作物によってゾーニングすることで、住宅建設地をある程度コントロールできる可能性があると言えます。農地のゾーニングは、営農環境と居住環境の両立を図るために一つの手段として、今後も可能性を検討していきたいと思います。



▲ アンケート調査の結果(抜粋)

都市計画キャラバン

都市計画キャラバンとは、「まちづくりに関する意見交換の場」です。ここでは、今までの調査や今後の方針などを報告し、県・町の職員の方々からフィードバックやアドバイスをいただきました。

【実施日時】2020年11月10日(火)10:00～12:00

【実施場所】小布施町役場

(東大チームはオンラインで参加)

【参加人数】約20人

(県・町・UDC信州の職員、東大メンバー)



▲ 東大チームがオンラインで発表する様子

地区計画策定の提案

本ラボは、小布施町での集落地区計画の策定・運用を通して持続可能なまちづくりを実現しようとしています。そこで、移住や農政・都市計画に関わる県や町の職員の方々が多く参加する都市計画キャラバンで“集落地区計画の策定を目指す”という方針を示すことにしました。そのため、過去5年間で行ってきたGIS分析や集落全員アンケート、農地調査などの研究結果を報告・共有しつつ、なぜ集落地区計画が適切か、を論理立てて発表しました。

この発表をもとに意見交換を行いました。参加した職員の方々からは丁寧な分析とデータの可視化に好評をいただくことができました。ありがたいコメントもいただくことができ、大変有意義な意見交換の場になりました。

今後に向けた協力関係を構築

当日の議論の一部を以下に紹介します。

▷ 小布施に合った計画とは

県の職員からは、「集落地域整備法の集落地区計画が小布施に合っていると思う」とご意見をいただきました。この集落地域整備法は、農政と都市計画による共管法であるため、両サイドが一緒に考え方をまとめていく必要性を確認しました。

▷ これからの期待と新たな視点

県の職員には、「ぜひこれからも関わっていただき

たい。詳細な調査から作物の状況なども含めた計画の提案をすると新しいものができるのではないか。」と期待の声をいただきました。また、町の職員からは、「新しく来る方もコミュニティに溶け込めるよう地区計画を策定してもらいたい」との意見もあり、いただいた新たな視点を考慮しながら、議論を進める予定です。

▷ 農業と都市計画を包括的に捉える

UDC信州の方には、「小布施町に移住してくる方に対しては、農業をやりながらコミュニティを形成していくような小布施らしい土地利用のコントロールが必要になる。」とご意見をいただきました。農業と都市計画を包括的に考え、模索しながら、今後のまちを考えていきます。

参加した方々と今後の方向性を共有することができました。今後も、持続可能なまちづくりに取り組むにあたり、県や町の農政・都市計画担当者と協力体制を築いていきたいと考えています。



▲ 発表後、資料を囲んでの議論

2020 年度

写真展・シンポジウム ~小布施の風景 を考える10日間~

小布施町の未来像を考える手がかりとして、地域の皆さんにとって未来に残したい風景を写真展の形で共有しました。同時に、小布施町の未来像について考えるきっかけであるシンポジウムを開催しました。

【実施期間】2021年3月12日(金)～3月21日(日)

【開催方法】オンライン及び小布施町内開催

【シンポジウム参加人数】

小布施町内の学生8名、

現地参加:32名、オンライン参加:13名

地域の皆さまが魅力に思う小布施の風景を探し出す、「オンライン写真展」

小布施町の未来のあるべき姿を考え、実現することが本ラボの取り組みの目標です。しかし、「理想の小布施町の未来像」とは一体どういうものでしょうか。地域の皆さまが残したい、良いと思う小布施町の風景とは一体何でしょうか。それを把握するため、地域の皆さまから写真を集めて共有する、写真展示を企画しました。

これまで小布施町発行の町報や本ラボ発行の月報にて募集宣伝や応募写真を目にした方も多くいらっしゃるかもしれません、まずは紙面等の媒体を通して、地域の皆さまが思う小布施町の良い風景を共有してきました。おかげさまで累計約70枚の写真が寄せられました。

写真展企画～8月・9月～



▲紙面上の写真展の様子(月報2020年10月号)

分散型写真展 「たどる、ふちどる、いろどる」

3/12
～
3/21

寄せられた写真からも分かる通り、小布施町には様々な魅力があり、人によって見え方はそれぞれです。一面に広がる田んぼ、桜並木、懐かしさを感じる公園、馴染みのあるお宮、遠くに見える雪化粧の山々、道端に咲く鮮やかな花…。このような数々の魅力を紙面での紹介に留めてしまうのはもったいない。地域の皆さんと共に共有し向き合う機会をつくりたい。そのような想いから、小布施町内の学生たちと協働して、町内開催の写真展を企画しました。

「たどる、ふちどる、いろどる」というテーマには、思い出や風景をたどり、写真でふちどりながら、心をいろどること、という想いが込められています。展示場所は、おぶせミュージアム・中島千波館の一角にある木造館を主な拠点とし、北斎ホールのロビーやまちとしょテラソの入り口・多目的室、高井鴻山記念館の回廊といった、複数の会場を設けて、町を贅沢に使いました。

会場を回る中で、町に出て歩き、自分の目で町の魅力に触れてほしい、散策中にふらっと気軽に立ち寄ってほしい、小布施町の魅力を再発見する機会としてほしいといった想いを込めて、会場の選定や企画を行いました。



▲写真展を見に来た方たちの様子

もっとアクティブに魅力をたどってつくる 「小布施三十六景」

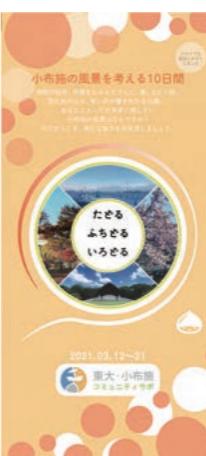
3/20

写真の展示会場以外にも、町中を使って小布施の魅力を探しに出るような機会をつくりたいと考え、写真展期間中のイベントとして、たどってつくる「小布施三十六景」を企画しました。参加者には、小布施の魅力的な風景を三十五箇所記したマップを元に、自ら町を回って写真を撮ってもらいました。この三十五箇所は、町内の学生が町内で普段何気なく見過ごしている魅力的な風景を探し、選定したものです。

「三十六景」は小布施町に所縁がある葛飾北斎の「富嶽三十六景」に由来しています。その小布施版の「小布施三十六景」を、事前に選定した「三十五」景+参加者それぞれのとておきの「一」景を足し合わせることで完成させる、という想いを込めています。

イベント終了後も、三十五箇所をまとめたマップはどなたでもお持ちいただけます。ぜひ、町に探しに出てみてください。

リーフレット▶



小布施出身就活生が考えるこれからの日常風景 ～小布施の魅力因子4Pから～

井出雪月・久保田康暉・村田千華

就職活動中の小布施出身大学生として企業分析方法の4Pを用い、理念・人・得られるものやこと・仕事や活動の4観点から小布施の魅力を分析し、未来の日常の風景を想像しました。見えてきた魅力は、理念の面では変化への前向きさや周りの人への開放性。人の面では町内町外を問わない人の交流や小布施愛の強さ、そしてまちづくりプレイヤーの多様さ。得られるものやことの面では豊かな教育やイベントの機会、自治会・まち全体レベルでの人のつながり。仕事・活動の面では独自性ある産業や自発的な活動。

十分生活の場として魅力がありますが、就活生としては雇用の少なさが気になりました。ただ私たちは、闇雲に雇用を増やすべきとは考えません。雇用ではないからこそその豊かな活動や、リモート化に伴うワーケーションや多拠点生活の場といった新たな日常の可能性も考えられ、ワクワクせずにはいられないです！



▲発表を行う井出さん(左)と久保田くん(右)。村田さんは東京からオンラインで参加。

シンポジウム あなたと描く小布施の未来 -100年先をいざる日常の風景-

パネラー

小泉 秀樹 教授
桜井 昌季 町長
市村 良三 前町長
牧 けい子さん（風の会）
小林 つや子さん（風の会）
コーディネーター
新 雄太 特任助教
以下、敬称略



自己紹介と学生の発表を受けて

新 お一方ずつ自己紹介と、シンポジウム前半の発表を聞いての簡単なご感想をお願いします。

小林 風の会の小林つや子です。東大の皆さん、よくぞ通り門に目を向けてくださいました。私たちは風の会6名の中の事務局をやっているんですが、20年カントリーウォークをして、そこに当たり前のようにあるものを、それがすごいぞって気づいてくださる東大生のみなさん、そして小布施の学生さんも、ここが素晴らしいって見てくださることにとっても感激しました。ありがとうございます。

牧 同じく風の会、牧けい子です。なかなか私たち自身もコミュニティ単位っていうのはあまり考えたことがなかったので、一昨年の水害のような場面を考えたときに、コミュニティの繋がりというか協力とい

小布施の農業や農村の魅力を多くの人に伝える「カントリーウォーク」を20年に渡って実施している。



小林 つや子
風の会 事務局



牧 けい子
風の会 代表

新 雄太

東京大学大学院 工学系研究科
都市工学専攻 特任助教。
専門は、建築設計・意匠、地域運営、空き家活用まちづくりなど。



うのは、これからもっともっと大事になっていく時代になると感じています。よろしくお願ひします。

桜井 皆さんこんにちは。今、発表を聞きまして、いくつか思った中でまずはひとつだけ。通り門の話ですけれども、私にとっては極々普通の風景だったんですね。いわゆる災害、防災に関する面があるというのが、「あーなるほどな」と改めて感じました。台風19号以来、防災というのはまちにとってものすごく重要なものとなってきます。ただやはり防災をすることでの犠牲になるもの、例えば風景であるとか。やはり防災は必要、でも素晴らしい風景は壊さない、そういう防災はどうすればいいか、新しく考えなくて

桜井 昌季

小布施町 町長。
栗菓子製造販売業の社長を経て、2021年1月より小布施町長に就任。 ※前小布施町商工会長



本ラボでは、2021年3月14日に北斎ホールを会場にシンポジウムを実施し、その様子をオンライン配信しました。シンポジウムでは、「風景」という大きなテーマの下、東大チームからこれまでの研究成果を、小布施出身学生から小布施の未来について考えたことを発表しました。

その後、これらの発表を踏まえ、桜井町長、市村前町長を含む非常に豪華なメンバーで、小布施の風景・未来についてパネルディスカッションを行いました。ここではその様子を一部抜粋してお届けします。

市村 良三

小布施町 前町長。
2005年から4期16年、小布施町長を務め、「協働と交流」のまちづくりを牽引してきた。



はいけない点かなというのを、今回つくづく感じました。よろしくお願ひします。

市村 皆さんこんにちは。ご無沙汰しております。市村良三でございます。外や町の若い皆さんに真剣になって小布施について調べ、関心を持っていただいているということに大変ありがたさを覚えております。私は農村部における素晴らしい景観がずっと周りを取り囲み、だんだんと中心部の濃密な景観に至るまでを「景観のグラデーション」と勝手に呼んでいます。まちなかの景観という部分も、農村部のその美しさがないと全然映えないと、ずっと思ってきた。なので、農村景観は物凄い価値だと思います。この価値を守りつつ新しい価値を生み出していくには、地域の皆さんのお力が一番大きいと思うんですよね。いろいろな制度や法にもその地域の皆さんの大いな声、熱い声が必ず届くという風に思っています。ですから今回、東大の学生さんが着手していただいたことをぜひ継続していっていただきたいと思います。よろしくお願ひいたします。

大切にしていきたい風景について

新 市村前町長、4期16年やられてきて、「うちは自分のもの、外はみんなのもの」というスローガンのもといいろいろなまちづくりを段階的にされてきたと思います。市村前町長がお考えの、いわゆる原風景や、大切にしていきたい風景、生活の場面などを教えていただきたいです。

市村 大切なのは小布施町の人に共通している「一緒にやりましょう」というような気持ちだと思います。私たちが保育園に通っていた時や小中学校の頃はあまり正規の道を歩いて通園通学した覚えがないんですよね。ほとんどが人の家の庭とか、道なき道というか、そういうところを歩いていく。その方が面白い、楽しいからなんですね。そういうことについてどうなたも不思議に思わなかつたんですね。これは

子どもたちだけではなくて、大人の皆さんもそうだったんだと思います。で、お宅に縁側のようなものがあって、そこが社交場、交流の場所で、腰かけてお茶をいただきながら話すということが普通に行われていたのが田舎というものではないのかなと。そういうことが大きな「まちづくり」の基本ではないかなと思います。そういう体験を地域で絶対守っていかなければいけないなということを強く感じました。

新 ありがとうございます。そうですね、小布施って何度も訪れていると、ほかの町と比べるのもなんですが、関わられる場所が多いんですよ。こんな小さな町なんだけど、皆さん言いますが、本当に行ける場所が多いんですよ。思いやりというか、信頼感がお互いに本当に強いというのを感じています。そうした地域の繋がり、紐帯(ちゅうたい)が日頃から強いのではないかと思うのですが、桜井町長、そういった意味で、幼少期から小布施で過ごして、町長ならではの生活景(生活に即した身近な景観)を教えていただけたらと思うのですがいかかでしょう。

桜井 私がまだ町長になる前、ある栗菓子屋の社長をしているとき、経産省のホームページでいろいろな地方の方を紹介するという企画がありました。そこで、ちょっとかっこつけて、いろいろなまち関係のイベントとかまちづくり関係に頭を突っ込んでいましたという話をしたんです。そこで、「なんでそこまでするんですか」という質問があって、「小布施町が発展すればするほど巡り巡ってうちの商売も潤うんですよ」という返事をしました。そうしたらね、いろいろな経営者の話聞いても、「どうすればうちが儲かるか」という話ばかりで、「小布施町がこんな風にならたらそのうちうちも儲かるでしょ」みたいなことを話す町は初めてだって言うんですね。だから、まず自分たちの商売、生活を追求するよりも、どうしたら小布施町が潤うか、小布施町が元気になるかってい

小泉 秀樹

東京大学大学院 工学系研究科
都市工学専攻 教授。
専門は、コミュニティ・デザイン、協働のまちづくり、市民主体のまちづくりなど。



うのをまずみんなで考える。その辺が小布施町の特異な点というか、まず町としてどうあるべきかというのをわりと皆さん根底に持ってらっしゃるのだと思います。それは商業であっても農業であっても同じで、住まわれている方々がそういう意識を共通して持っているのが小布施町のある意味特徴なのかなという気がしました。

新 ありがとうございます。実はまちづくり研究室教授の小泉がそろそろオンラインに入ってこられるかなと思っています。小泉先生、今までのお話を聞かれていいかがでしょうか。

小泉 はい、小布施はまちづくりをやっている専門家の間でも非常に有名な町ですので、それがなぜかというと、やっぱり昔から引き継いできた様々な景観に加えて、景観だけではない文化性を継承されてきていて、それを発展させているというところにあるのかな、と思っています。人々を温かく受け入れたりもてなしたりする文化や感性があるのかなあと思っていて。大切なのは空間の景観だけではない、と思ってお話を聞いておりました。

新 そうなんですよね、やっぱり空間があってもそこに人の営みが無いとそれが風景にならないのではないかっていうのは、私も感じています。

制度と農業について

新 制度があることによって守られてきた風景もある一方で、ちょっと生活しづらくなってきていたり、弊害もあるのではないかというのが、我々の研究の一つの背景にあります。風の会の皆さん、これまでのご経験の中でやりにくいところがあるな、こうなったらいいのにな、とか率直なお話を聞かせください。

牧 はい、20年カントリーウォーク続けてきましたと、本当に荒廃農地が増えてきて、現実目に見えてわかってきて、仕事としてやりづらい世の中になってきていると思います。でも、この農業というのは本当にこれからもっともっと大事になっていく時代なのではないかなと思っており、守つて行く必要があると考えています。つや子さんどうですか。



▲お話ししている小林さん(左)と牧さん(右)

小林 細かいことですが、実は、私たち歩いている中で最初はきれいなところを見て頂いていたんです。この辺は草すごいから通るのをやめようかって、コースを作っていたんです。それが、ここ3年くらい前から、それでもそれでも荒れている畑が目立つようになってきました。そこで発想を転換して、こうやって荒れてきていますということを来た方に見てもらうようになっています。また、そこで手間かからないで草取りもそんなにしないで、遊休農地に植えられる品種はないものかいろいろ考えて、私たちがたどり着いたのがフキだったんです。フキだと、葉っぱがいっぱいなので、ちょっと植えとけば景観にはいいかなと思って。まだ微力なんですが、ぜひそんなに手間をかけずに、でも荒廃農地にこれを植えとけばいいっていうのを、どなたか教えてください。

新 ありがとうございます。昔は畔豆(あぜまめ)だなんて言って、畔にも豆をそこら中に植えるぐらい、ふんだんに土地利用していました。それが今、荒廃農地が広がって、どうしても草伸びますからね。だから、ありのままの姿を知ってもらい、みんなでどうしていこうか考える契機をつくられていると感じました。

これからの小布施が目指すまち

新 桜井町長。今までのお話を含めて、これからの小布施町のまちづくりとしては、どのようなところを目指されているのかを率直に聞いてみたいと思いますが、いかがでしょうか。

桜井 農地と住宅のあり方について、例えば経済

性・効率性を考えれば、農地は農地、住宅は住宅で整備するのがいいのではと思います。しかし、今の、住宅の中にポツポツ農地があるという風景は実は好きだったりするんですよ。ちょっとした畑って大事だなって思うので、生活の部分と、生きがいの部分と、両立する必要があるというか。そういうものがどういう形が良いのかと考えるところもあります。だから、今何が正解かは正直わかりません。ただ、ちゃんと安全に、金銭的にも生活ができる、尚且つ、楽しめる、幸せであるというあり方をやっぱり考える必要があるのかなというのが一つ。

それと、私としては、こういうこれから的小布施町を考えるというテーマの集まりをする時に、もっともっと、これから的小布施を支える若い人に対してもらって、自分たちの話が、自分たちの意見が通るんだ、発表できるんだと楽しんでもらえる、そういう空気を作るっていうのが大事な仕事だなっていう風に今感じています。

新 生活、生きがいの両立をどう図るかいろいろなアイデアがあると思いますが、役場の皆さんや自治会の方々とかと対話を中心に進めていくしかないなというのが私たちが考えているところです。これまで地域を牽引してきた自治会という存在、そこに小布施町さんでは自治会を束ねる連合会のような形でコミュニティを作られて運営されてますが、コミュニティのあり方として地

域の風景を維持継承していく上では大変重要な組織だと思っているんですけども、市村前町長、今後どのようにお考えでコミュニティを維持継承していくればいいか、お話を聞きたいなと思います。

市村 先ほどの桜井町長がもっと若い方にまちづくりを理解し、参加していただきたいというお話は、全く私も同感であります。自治会とコミュニティという問題は、27ある自治会で、歴史と文化、風土っていうのも若干違うんですね。その違いが私はすごくいいなと思っているので、理想を言えば今の自治会がそれぞれ単独でやっていただければ最高なんだけだと思います。けれど、今後少子高齢化や価値観の多様化なども含めた中で、運営の仕方によっては、大枠のコミュニティという形でないと無理なところも出てきているのかなという風に思います。それにも、それは各自治会の自治の皆さんがどういう風にお考えになってどういう風に決めていくかが非常に重要なだなと思います。



▲お話ししている桜井町長(左)市村前町長(中)と新特任助教(右)

パネルディスカッションを通して

新 雄太 特任助教

皆さん、短い時間でしたが貴重なお話をありがとうございました。今後もこうしたシンポジウムを定期的に開催しながら、これからの景観、これからの地域の営みを支える持続的な土地利用マネジメントなどについて地域の実情に寄り添った形で示し、議論を深めていければと考えています。コロナの影響で引き続き現地での研究活動が難しい状況が続いますが、小布施出身の学生たちとの継続的な協働体制のもと、今後も地域の皆さんとの対話を通じて、より具体的な方策提案を段階的に進めてまいります。ご協力のほど、どうぞよろしくお願ひいたします。

3

これからの コミュニティ・ラボ

これからの歩み

これからは集落地区計画の策定を最終目標に、種々の活動を展開して参ります。はじめは小布施町の現況をより深く把握するため、建築資源や土地利用の実態、地域の皆さまの小布施町に抱いている印象や将来像などの情報を集め分析します。それを元に、集落地区計画という手段によって小布施町ではどのようなことが出来るのかを地域の皆さんと対話しながら探っていき、より望ましい将来像へ繋がるような計画の策定へ繋げていきます。

調査・分析 / 実践・検証から将来像の提案へ



各活動の詳細(予定)

#1 各種調査・分析

小布施町の現況を把握するため、通り門や分家住宅建設時の課題、農地をはじめとした土地利用実態など多岐に渡って調査を進めています。

調査結果を元に、これから解消すべき課題や残していくべき資源について整理を行い、小布施町の将来像を考える基礎を作ります。



▲調査と分析のイメージ

#2 ふらっトーク

地域に対する思いや理想の将来像、そしてその実現のために何が必要となるのかを、いくつかの話題を切り口に、地域の皆さま同士で気軽に共有できる機会を設けます。そうした意見交換の中で生まれた共通の将来像を集落地区計画で実現する目標としてセッティングします。

#3 集落地区計画勉強会（定期開催）

集落地区計画という制度によって何ができるのかを地域の皆さんに分かりやすく共有し、その上で小布施町ではどのような計画が求められているのかについて話し合う場を定期的に設けます。そこで議論を踏まえて集落地区計画の内容を少しずつ形づけていきます。



▲集落地区計画勉強会のイメージ

#4 景観について考える開かれた機会

2021年3月にはシンポジウム「あなたと描く小布施の未来」、写真企画「たどる、ふちどる、いろいろ」、参加型スナップ企画の「小布施三十六景」など景観を主軸としたイベントを開催し、ご好評をいただきました。これからも景観に関するイベントを開催し、将来の小布施町に受け継ぐべき、景観の発掘と共有を行っていきます。



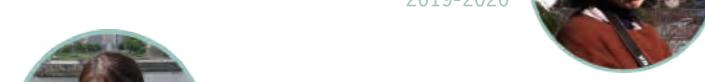
▲2021年3月開催企画の一つ『小布施三十六景』

#5 社会実験

これまでに都住地区を対象に行ったアンケート調査では、よりアクセスしやすい日用品・食料品の買い物場所、移動支援サービスが欲しいと言った声が聞かれました。今後、どのように実現するかを検討するため、社会実験を実施して必要なデータを取得していきます。

ラボメンバーの「小布施への想い」

美しい町並みと農村風景が共存し、先進的な挑戦が絶えないまち、小布施。多くの優しさに包まれ、実りある活動に携われました。将来、さらに進化した小布施を訪れるのが楽しみです。



2019-2020



東窪有紀

2019-2020

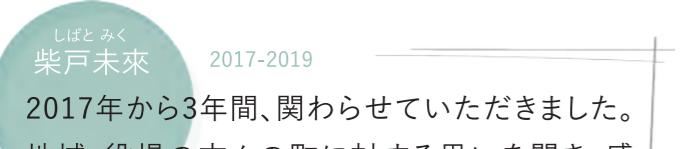
流れる空気がとても好きです。一度しか伺うことができないまま終えてしましましたが、短い滞在期間でも澄んだ空気の美しさや出会う方々の温かさが強く感じられました。



2017

石井沙知香

上田出身で、小さい頃から栗かのこが好きでした! ゆうがたget等で見ていた小布施に関わって嬉しかったです。素敵で優しい小布施のますますのご発展をお祈りしています!



柴戸未来

2017-2019

2017年から3年間、関わさせていただきました。地域・役場の方々の町に対する思いを聞き、感じ、そして一緒に未来の暮らしを考えるなかで学んだ多くのことは今も私の拠り所です。



2020-

竹中大貴

小布施町に関わる人がもれなく小布施町を心から愛していること。現地に行けないながらも感じ取っています。早く訪れ、私も一人前の小布施町loverになりたいです。

2017-2019

ときまる こうた
時丸耕太

東京で生まれ育った私は、都心とは別の魅力を持つ地域に関わりたいと考え参加しました。第二の故郷と書くと大袈裟ですが、小布施ほど名前を聞くと反応してしまう地域は他にはありません。



2019-2020

東窪有紀

2019-2020

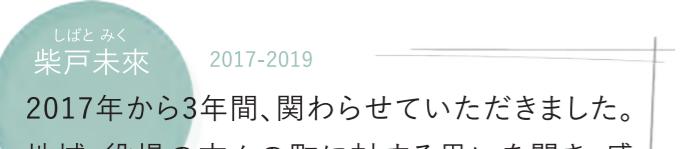
流れる空気がとても好きです。一度しか伺うことができないまま終えてしましましたが、短い滞在期間でも澄んだ空気の美しさや出会う方々の温かさが強く感じられました。



2017

石井沙知香

上田出身で、小さい頃から栗かのこが好きでした! ゆうがたget等で見ていた小布施に関わって嬉しかったです。素敵で優しい小布施のますますのご発展をお祈りしています!



柴戸未来

2017-2019

2017年から3年間、関わさせていただきました。地域・役場の方々の町に対する思いを聞き、感じ、そして一緒に未来の暮らしを考えるなかで学んだ多くのことは今も私の拠り所です。



2020-

竹中大貴

小布施町に関わる人がもれなく小布施町を心から愛していること。現地に行けないながらも感じ取っています。早く訪れ、私も一人前の小布施町loverになりたいです。

2017-2019

ときまる こうた
時丸耕太

東京で生まれ育った私は、都心とは別の魅力を持つ地域に関わりたいと考え参加しました。第二の故郷と書くと大袈裟ですが、小布施ほど名前を聞くと反応してしまう地域は他にはありません。



2019-2020

東窪有紀

2019-2020

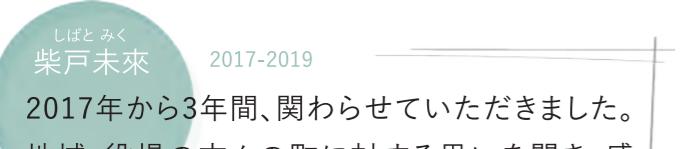
流れる空気がとても好きです。一度しか伺うことができないまま終えてしましましたが、短い滞在期間でも澄んだ空気の美しさや出会う方々の温かさが強く感じられました。



2017

石井沙知香

上田出身で、小さい頃から栗かのこが好きでした! ゆうがたget等で見ていた小布施に関わって嬉しかったです。素敵で優しい小布施のますますのご発展をお祈りしています!



柴戸未来

2017-2019

2017年から3年間、関わせていただきました。地域・役場の方々の町に対する思いを聞き、感じ、そして一緒に未来の暮らしを考えるなかで学んだ多くのことは今も私の拠り所です。



2020-

竹中大貴

小布施町に関わる人がもれなく小布施町を心から愛していること。現地に行けないながらも感じ取っています。早く訪れ、私も一人前の小布施町loverになりたいです。

2016年度からスタートした本ラボの活動には、延べ30名以上の学生メンバーが関わってきました。この節目に、関わってきた学生にそれぞれ、活動を通して感じた「小布施への想い」を聞いてみました。今後もメンバーは変わっていきますが、小布施に対する熱い想いは引き継いでいきます! 引き続きよろしくお願いします。

2017-2020 のとけんろう
能登賢太郎

プロジェクトに関わってきて小布施町の魅力をたくさん知り大好きな町となりました。ずっと先の未来まで小布施町の魅力が受け継がれていてほしいと思います。



2016-2018



小布施の皆さんに聞かせていただいた昔のこと、調査の道中で分けていただいた林檎、雁田山で分かる方角…小布施は第二の故郷のような存在です。皆様のご健康と町の益々の発展を願っています。

2019- すさき たまよ
洲崎玉代

初めて小布施に訪れてから5年。その後通う中で出会えた、町の人たちはとても暖かく、素敵な友人たちに巡り合いました。これからも小布施と関わっていくことが楽しめます。

2017-2019
久恒沙希

私は、小布施の人の温かさと四季が大好きです。更に、活動をとおして様々な方と関わせていただき、第二の故郷と感じております。また今度、小布施に遊びに行きます!

2017- まつだ ようた
松田陽多

手探りな状態から5年間、未だ調査ばかりではありますがあなたに助けられながらの活動でした。いいよいよ具体的に時代に合った地区のありかたを形にしていきます。今後もよろしくお願い致します。

2018-2019
みやぞの ゆうと
宮園侑門

小布施に通う間に、美しい四季の移ろいや恵みを体感させていただいたことが忘れられないです。これからもその営みが永く続くことを祈っています。

しまだ かえで
島田楓

2020-

私は2020年秋に参加したばかりで、小布施を実際に訪れたこともないのですが、だからこそフレッシュな気持ちで活動していきたいです。お会いできる日を待ちしております。

2020- むらた ゆきか
村田千華

まだまだ関わった時間は短いですが、小布施の方の温かさと小布施愛の強さをひしひしと感じています。そんな素敵な小布施の最大の財産を今後にも受け継いでいくような活動を目指したいです。

2018- すずき あかね
鈴木茜

当たり前に温かくて素敵な人々がいて、当たり前に新しいことに取り組んでいる小布施が大好きで、一町民として誇らしいです!これからも素敵なまちであってほしいな、と思います!

～5年間の活動を振り返って～

長野県建設部 都市・まちづくり課長
高倉 明子さん

先端研の皆様が市街化調整区域を研究の場とし取り組む姿は、都市計画は行政主導から脱却し、町民の力を糾合して、専門的知見を取り入れながら進める仕組みの必要性を確信しました。大学では経験できない、現場で感じた農地行政の強い抵抗がありますが、町民参加のもと、都市計画法と農地法・農振法の新しい共生関係の構築を引き続き一緒に模索していきましょう。

小布施町役場企画政策課定住係主査
勝山 貴代さん

この5年間の活動中、私が濃くこの活動に加わったのは最後のたった1年間です。ただ、この1年間で小布施の未来を変えるかもしれない、小布施の大学生と東大生との本当の意味での共同研究の活動形態がコロナのお陰でできました。外の力だけではなく、内の力だけではなく、両方ががっつりと組みあってもっともっと小布施を魅力的にするのだと思っています。これからどんどん小布施の学生と東大生とで化学反応を起こし、古きを尊びそこから新しきを生み出す取り組みになるようサポートしたいと思います。この5年間の活動を礎として。

東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻
小泉 秀樹教授



本年度(2020年度)は、新型コロナ感染症の影響もあり、当初想定していた場づくり(placemaking)などの活動はできませんでしたが、町役場の協力もあり、小布施出身学生メンバーが組織され、東京の東大コミュニティラボメンバーとのリモートでのコラボというユニークな取り組により、集落・農地の現状に関する調査と情報の集約/整理など行いました。また、ワークショップの開催が難しいことから、写真展を開催し小布施の魅力的な風景を町民のみなさんの参加で発見し、その成果をもとに、新旧町長にもご参加いただき、これから大切にしたい風景について話し合いました。次年度も、新型コロナ感染症の影響は続くと思いますが、そうした時代にマッチした新しい形での活動方法も引き続き模索しながら、小布施の集落の地域づくりに貢献できればと考えています。引き続きよろしくお願いいたします。

小布施町役場 総務課 課長
大宮 透さん

東大先端研の皆様には、2016年度からの5年間、町内全域の空き家の実態調査や都住地区における地域調査、写真展の開催など、様々な活動に取り組んでいただきました。活動の様子をまとめる形で毎月発行し、都住地区に回覧していただいている月報は、個人的に密かな楽しみでした。これまでの活動を踏まえながらこれからも協働させていただき、都住地区をモデルに、今の時代に即した農村地域のあり方を具体化していくことを心から楽しみしております。

小布施町 都住コミュニティ会長
寺島 正雄さん

東大先端研の研究に、多少なりとも協力することができたと思っております。その中から、地域の状態を知ることで問題点を可視化することができ、「都住の縁側」「ふらっトーク」等のイベントでは、地域の様々な方の意見を聞くことができましたことは、これからコミュニティ運営に役立つことだと思います。都住地区の地域づくりには、課題が多くありますが、東大先端研や地域・町政と協力体制を取りながら継続する取り組みにしていきたいと思います。そこで、様々な提言をお願いします。

2016年度から5年が経過し、この節目を機に、活動と一緒に進めてきてくださった町役場の方や先生方、ご協力してくださった長野県職員の方や地域の方から、活動を振り返ってみた感想と小布施への期待・想いについて聞いてみました。

小布施町 建設水道課 課長
(2020年度3月定年退職)畔上 敏春さん

まずは、5年間の活動ご苦労様でした。これからも小布施町の魅力発見・発信と地域コミュニティ活性化に向けた取り組みに期待しております。2016年度から東大先端研・小布施町コミュニティ・ラボでの取り組みは、小布施町が以前から抱えていた町郊外の活性化に向けた調査・研究・提案と、町職員の感性では及びもつかない発想転換による取り組みであったと思います。町外で生活されている皆さん、小布施町の良い所・悪い所を見出し、住民が住み続けたい、町外の方が住んでみたいと思える地域づくりができる事を期待しております。

小布施町 都住コミュニティ事務員
松本 さゆみさん

「流しそうめん」をしたことを思い出します。初体験の方が多かったこと、一家庭だけでは楽しめないものを、このコミュニティで味わえたのかと思います。この時食べた「スイカ」。次の年、駐車場になぜかスイカの芽が!!観察を続けると、実がなり、食べられるのかと半信半疑でしたが、おいしくいただきました。種がこぼれ、実を結ぶ、コミュニティの輪も東大の方々が種を蒔いてくださったのでこれから都住のみなさん方といろいろな活動の輪が咲き、実がたくさんなったらうれしいですね。

小布施町 健康福祉課 課長補佐
益満 崇博さん

私がこの東大先端研・小布施町コミュニティ・ラボの研究活動に関わらせていただいたのが、2017年度から2019年度までの3年間でした。それまで都市計画や農政に携わる経験や知識もなかったため、学生の皆さん的研究活動をバックアップすることぐらいしかできませんでしたが、私にとっては大いに刺激を受け、多くを学ばせていただきました。ありがとうございました。小泉先生、新先生、そして学生皆さんのが今後の活躍とご健康を祈念いたしますとともに、ラボの研究活動に期待しています。



▲都住コミュニティセンターの駐車場で実ったスイカ

東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻
新 雄太助教



小布施町は「表面積が大きい」といつも訪れる度に感じます。オープンガーデンに代表される半公共領域が多く分布し、多様に繋がり合っているというだけでなく、何よりも地域の皆さんや役場の方たちの寛容な“あたたかさ”がそう感じさせてくれます。演習や調査などで幾度も親身にお付き合い頂き、受け入れてくださった都住地区はじめ、小布施町の皆さんに感謝で一杯です。歴代の学生たちとともに、多くの大切なことを学ばせて頂きました。今後は、これまで積み重ねてきた地域の実態を可視化する段階から、これから暮らしのありたい姿を描き実践する段階へ移行していきます。具体的には、これまでどおり地域の皆さんとの対話の場を基本に、実際の空間で小さく・楽しく試しながら、土地や建物に関する制度のリデザインを進めます。子どもたちの未来のための検討を地域全体ではじめ、持続可能な農村コミュニティの維持継承を実現していきましょう!

編集後記

私がこのコミュニティ・ラボの活動に関わり始めて、まだ一年ほどしか経っていませんが、今回は運よく、このような5箇年度の最後と新たな活動の継続という大切な節目に巡り会うことができました。ブックレットの作成を通して、これまでに多くの先輩や先生方、小布施町役場の方や住民の方など、多くの方の沢山の想いが積み重なってきていることを改めて実感しました。同時に、これまで寄せられた多くの想いを大切にしながら、実際に形にしていく貴重かつ重要なフェーズに携わることができることを大変幸運に感じています。私が学生としてこの活動に関わることができる時間もあと少ししかありませんが、本ラボの期間に縛られることなく、小布施町の暮らしの中で引き継いでいっていただけるものを残せるよう、全力を尽くしたいと改めて感じました。今後ともどうぞよろしくお願いします。

(東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻 官 尋)

まずは、最後までお読みいただきありがとうございます。この度、東大・小布施町コミュニティ・ラボの設立5年の節目ということで、これまでの活動をまとめたブックレットの製作にとりかかりました。私自身は、設立当初から参加していたわけではないため、今までの経緯をきちんと理解しているわけではありませんでした。しかし、このブックレット製作を通じて、諸先輩方が地域の皆さんと積み上げてきた議論や活動成果があってこそ、今私たちが未来の小布施に向けた議論ができるのだということを改めて感じることができました。これまで本ラボメンバーとして活動してきた諸先輩方、活動を支えていただいた先生方、ご協力いただいた地域の皆さんには本当に感謝しております。

本ラボでは、これまでの活動成果を踏まえ、今後さらに具体的なアクションへと歩みを進めていくつもりです。どのような小布施の未来を描いていけるのか、ワクワクする気持ちとともに、とても大きな責任を感じています。小布施町に、そして地域の皆さんに真摯に向き合って、皆さんと一緒により良い未来を考えていきたいと思っております。これまで本ラボの活動に関わっていただいた方も、このブックレットで活動を知っていただいた方も、ぜひ今後の東大先端研・小布施町コミュニティ・ラボをご支援いただけますと幸いです。

(東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻 鈴木 茜)

情報はこちらから

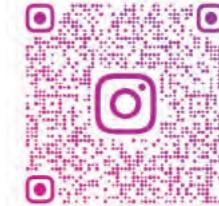
LINE公式アカウント



Facebook



Instagram



問い合わせ

小布施町 企画政策課 企画交流係

〒381-0297 長野県上高井郡小布施町小布施1491-2

Tel: 026-214-9102

Mail: kouryuu@town.obuse.nagano.jp

東京大学大学院 工学系研究科 都市工学専攻 まちづくり研究室

〒113-8731 東京都文京区本郷7-3-1 工学部14号館

Tel: 03-5841-6256

Mail: info@cd.t.u-tokyo.ac.jp



CREDIT

発行 東大先端研・小布施町コミュニティ・ラボ
2021年 7月

編集 小泉 秀樹 新 雄太

鈴木 茜 官 尋 今本 健太郎 松田 陽多 竹中 大貴
森田 洋史 星野 祐輝 増田 多聞 村田 千華 洲崎 玉代
島田 楓

協力 小布施町 長野県
小布施町の皆さん コミュニティ・ラボOBOGの皆さん

